

第4回
高校生
アーティスト
ライタ―
大賞
優秀作品集



筑波大学
University of Tsukuba

2012

第4回高校生アートライター大賞

高校生アートライター大賞とは
アートについて自分の言葉で考え、伝える力を育む、高校生のためのエッセイのコンテストです。
2005年から一年おきに、筑波大学で開催しています。

課題 アートとあなたとのかかわりを、2000字のエッセイにして送ってください。

募集部門

- ◎ 制作体験 自分が作品をつくった体験をもとに書く
- ◎ 作品探究 アーティストがつくった作品について書く
- ◎ 芸術支援 アートと人々の交流について書く

応募できる人 高等学校ならびにそれに相当する公的教育機関に在籍する生徒。

賞〈賞状ならびに記念品〉 大賞3編 / 優秀賞 / 学校賞

応募締切 2011年10月11日(火) 結果発表 2012年12月、ウェブ上にて

条件

2000字以内で、個人が日本語で執筆したもの。図や参考文献一覧等は文字数に含まれません。文章の題名を各自でつけてください。小論文のように論題を設定して論理的に考察しても、体験報告や随想のように個人的な思いを中心に語っても、雑誌や新聞記事のように伝えることを主眼にしたものでも構いません。

「アート」の範囲は、美術やデザインを中心とした視覚芸術を想定していますが、執筆者が自由に判断してください。学校の美術教科書にも、多様な美術の例が示されていますから、参考にしてください。

応募方法

下記ウェブサイトから書式をダウンロードして、応募一編につき、[1]応募原稿 [2]応募票の二点を提出してください。
1~3のいずれかの方法でお送りください。

- 1 電子メール応募 電子メールに添付して、awa@geijutsu.tsukuba.ac.jp へお送りください。
 - 2 学校応募 10編以上まとめて応募する場合は、CD-R等のディスクに入れて、下記あてにお送りください(当日消印有効)。
 - 3 手書き応募 手書きした原稿と応募票を、下記あてにお送りください(当日消印有効)。
- あて先 〒305-8574 茨城県つくば市天王台1-1-1 筑波大学芸術専門学群 高校生アートライター大賞係

選考委員 ゲスト選考委員(五十音順)

- 穴澤 秀隆 『美育文化』編集長
 - 奥村 高明 聖徳大学教授(前国立教育政策研究所教育課程調査官)
 - 熊倉 純子 東京藝術大学教授
- 芸術専門学群選考委員
- 守屋正彦(芸術学専攻) 玉川信一(美術専攻) 笹本 純(構成専攻) 鈴木雅和(デザイン専攻)
- 芸術支援コース選考委員
- 岡崎 昭夫 齊藤 泰嘉 直江 俊雄
- 学生選考委員 筑波大学生

個人情報の取り扱い等

ご提出いただきました個人情報は、本コンテストに関する用途のみに使用します。応募原稿の著作権は、筑波大学芸術専門学群に帰属します。応募原稿を出版物やインターネット等で公開することがあります。

お問い合わせ[芸術支援研究室:直江] TEL 029-853-2821 awa@geijutsu.tsukuba.ac.jp

詳しい応募方法やこれまでの入賞作品等は、ウェブでご覧ください。

<http://www.geijutsu.tsukuba.ac.jp/~awa/>

主催 筑波大学芸術専門学群 後援 文部科学省 協力 新聞とことばのちからプロジェクト 企画 筑波大学芸術支援研究室

第4回高校生アートライター大賞優秀作品集

編集 直江俊雄 発行 2012年1月28日

本書は、平成23年度科学研究費補助金 基盤研究(C)「第三の美術展(コミュニティ型アートプロジェクト)による地域教育力の開発」(研究代表:齊藤泰嘉)の一環として刊行されました。

第4回高校生アトライター大賞 選考結果

2011年12月 筑波大学芸術専門学群 高校生アトライター大賞選考委員会

応募総数491編

大賞 (3名、五十音順)

小侯 美紅	夫婦ーめおとー	埼玉県	埼玉県立芸術総合高等学校	3年
川久保 美桜	リアルなリアル ～3.11以後のChim↑Pomにみるメディアとしての表現～	大阪府	大阪府立港南造形高等学校	2年
中山 知子	日本美に住まう	東京都	学習院女子高等科	3年

優秀賞 (19名、五十音順)

石川 晴香	何かが違う??	栃木県	栃木県立宇都宮中央女子高等学校	1年
伊藤 はるか	ささやかな楽しみ	北海道	北海道札幌平岸高等学校	3年
伊藤 大晃	近江の美術を描いてみて	滋賀県	滋賀県立膳所高等学校	1年
植竹 茉奈	「秋葉原」という街	東京都	東京都立工芸高等学校	2年
大谷 友子	「写実」である理由	神奈川県	神奈川県立相模大野高等学校	2年
木村 文	芸術におけるコンテクストを見つめ直すー「ミンウォン：ライブ・オブ・イミテーション」展	千葉県	渋谷教育学園幕張高等学校	3年
吉良 栄香	いただきます	熊本県	熊本県立第二高等学校	2年
菅原 光	バク	熊本県	熊本県立第二高等学校	2年
鈴木 りさ	伝わること	静岡県	静岡県立清水南高等学校	1年
玉井 鼓弓	石田徹也という世界	愛媛県	済美高等学校	1年
塚田 涼香	そこにある	東京都	東京都立工芸高等学校	2年
津波 百合菜	ぬけがらをつくる。	大阪府	大阪府立港南造形高等学校	3年
西崎 絵美	16	熊本県	熊本県立第二高等学校	2年
福田 美穂	媒体としての美術	静岡県	浜松学芸高等学校	2年
保坂 千春	哀愁の美	北海道	立命館慶祥高等学校	2年
宮入 惇	きまぐれな世界	静岡県	浜松学芸高等学校	2年
村上 苑子	写真と私	熊本県	熊本県立第二高等学校	2年
矢納 今日子	色彩の不思議	東京都	学習院女子高等科	1年
横本 明日香	元気のぼりと園児が教えてくれたこと	兵庫県	兵庫県立有馬高等学校	3年

学校賞 (7校、五十音順)

大阪府立港南造形高等学校	熊本県立第二高等学校	滋賀県立膳所高等学校
静岡県立清水南高等学校	東京都立工芸高等学校	浜松学芸高等学校 北海道札幌平岸高等学校

選考経過

2011年4月 第4回高校生アトライター大賞募集開始。

2011年10月11日 受け付け終了。応募総数491編。

2011年10月 第一次選考を行い、100編を選出。

2011年11月 第二次選考を行い、22編を選出。

2011年12月 最終選考会議を開催し、大賞、優秀賞、学校賞を決定。

第一次選考通過者（100名、五十音順）

足立 春佳	大谷 友子	幸松 洋大	高橋 朋夏	福田 美穂	谷野 綾音
阿部 花梨	大津 さやか	児玉 夢野	高山 真未	福田 遼	矢納 今日子
荒金 優理子	大塚 遥	小林 佐保	竹中 眸	宝満 恵梨伽	山口 紗希
荒川 莉佳子	荻 安里紗	崎山 龍晴	竹中 宏幸	保坂 千春	山路 莉穂
安東 尚代	小俣 美紅	佐々木 友里花	田中 拓斗	堀井 美沙子	山下 理香
池田 奈津	加藤 耀	澤野 千佳	田中 伸明	本多 美沙	山並 夏子
池田 真実子	川口 明子	澤登 信太郎	玉井 鼓弓	松井 緑	山根 香
石井 萌加	川久保 美桜	柴野 友梨子	塚田 涼香	松井 亮祐	山本 琴美
石川 晴香	北井 志歩	菅原 光	津波 百合菜	真鍋 由伽子	山本 はるか
伊藤 はるか	北浦 真保	杉本 隼一	寺井 悠朔	三木 豪士	山本 裕子
伊藤 大晃	杵渕 夏子	杉本 芽衣	長石 智保	三尾 希	横本 明日香
伊藤 優花	木村 文	鈴木 紗緒里	中司 裕理	宮入 惇	吉田 智樹
井上 侑基	吉良 栄香	鈴木 悠梧	西崎 絵美	宮村 美星	吉満 里奈
今井 啓太	久具山 桃子	鈴木 りさ	裕 翔愛	村上 苑子	李 理心
井元 景子	楠居 里奈	鈴木 里菜	橋本 風香	森永 帆南	渡邊 真央
植竹 茉奈	熊野 結衣子	埜田 ななみ	濱口 佳純	矢嶋 瑛美	
大石 千夏	河野 圭一郎	高橋 花帆	春田 実桜	中山 知子	

選考基準（第一次・第二次選考）

- 内容面
1. アートに関する自分らしい見方、取り組み方がよくあらわれている。
 2. 対象とするアート活動について、読者に伝わるようによく説明されている。
 3. 読んだ人の関心呼び起こし、強い印象を与える。
 4. できれば間接的な知識だけより、自分の実体験をもとに述べた方が望ましい。
 5. アートに関する基本的知識に重大な誤りがない。

- 形式面
1. 文章の流れが一貫し、伝えたいことがよくわかる。
 2. 自分の考えと、それを裏付ける具体的な事実の記述との対応がとれている。
 3. 調べた知識や引用と、自分の体験や考えとが明確に区別して書かれている。
 4. 日本語表記に重大な誤りがない。

ただし、形式面より内容面を重視する。

最終選考では上記の基準によらず、各委員による採点結果を集計し、それぞれの観点から議論を行った上で、受賞者を決定する。

第一次選考委員 大学院生：輿水 愛子 寺門 陽平 鳥山 裕加

教員：直江 俊雄 和田 学

第二次選考委員 学群生：川村 晃子 池田 寛子 井上 祐里 菊地 美里 高木 諒一 名古屋 千尋 三石 友貴 金沢 みなみ 辻 真理子

大学院生：輿水 愛子 寺門 陽平 鳥山 裕加 箕輪 佳奈恵 森 芸恵

教員：直江 俊雄

最終選考委員 ゲスト選考委員（五十音順）：穴澤 秀隆 奥村 高明 熊倉 純子

教員：守屋 正彦 玉川 信一 笹本 純 鈴木 雅和 岡崎 昭夫 齊藤 泰嘉 直江 俊雄

高校生アトライター大賞の選考にあたって

玉川 信一 芸術専門学群長

今回で第4回となる高校生アトライター大賞の選考に参加するのを楽しみにしていました。回を重ねるにつれて応募者が増加し、今回は491篇の応募という結果です。筑波大学芸術専門学群の高大連携事業の一環として、このコンクールが着実に進展してきたことを喜ぶとともに、高校生諸君の意欲と高校で指導されている先生方のご支援に感謝を申し上げたいと思います。

さて、このアトライター大賞には制作体験と作品探求と芸術支援という3部門がありますが、私が油彩画制作を専門としていることもあって、制作体験には特に関心がありました。今の高校生はどのような想いで制作しているのだろうか。制作の動機にはどのようなものがあり、どんな視点を提示してくれるだろう。応募作品を読みながら若い感性を感じ、その切り口を確認したかったのです。応募された作品はそれぞれ高校生らしい活気が溢れ、鋭敏な感覚が感じられるもの、制作するときの苦心が伝わってくるものなど楽しく読ませていただきました。ただ、全体としてはよく言えばまとまっているともいえますし、逆に少しお行儀が良過ぎるのではといった感想も持ちました。2000字以内という制限や制作体験の抽象的な思考を言葉で表すという難しさを感じます。私自身も制作に関するコメントを求められることが多いのですが、何か違う、何かずれているという意識を持ちながら言葉を並べることも多いのです。

私の作品制作に限って言えば、その発想は常に自身の日常生活の中の具体的な体験から生まれます。しかし絵画表現は、それらの体験としての挿話(エピソード)に留まるのではなく本質的なリアルを獲得すること、つまり単なる感想としての説明描写から普遍的類型としての構想表現への転換を期さなければなりません。そして、その転換を進めるには日常生活の体験から想起された感情や感覚によって形作られた挿話に対して、制作過程で視覚言語としての造形要素を駆使し、示唆と省略を積み重ね繰り返すことでその意味する地平を拡大し、絶対的普遍的平面に達するより他に方法はありません。

柔らかいデリケートな感性がとらえる挿話から結論としての表現に至るまでにもう少し試行錯誤の時間がほしい。性急な結論としての作品は分かりやすいけれど、なにか薄っぺらな印象が付きまといまいます。説明しにくい試行錯誤の部分にこそ表現の醍醐味があるのではとも思っています。

高校生の皆さんがこれからも芸術に何らかの形で携わってくれることを願っています。

不安をこそ表現すべきだ

穴澤 秀隆 『美育文化』編集長

「言葉を失った」なんて言えない

東日本大震災から約1ヶ月後、ようやく現地に取材に行くことができた。石巻の港に近い小学校で泥だらけのランドセルを見たとき、ぼくは言葉を失った。でも、すぐに思い直した。ぼくは美術教育の雑誌を編集している。言葉によって人や出来事をつなぐ仕事だ。事情はどうあれ、そのぼくが「言葉を失った」なんて言うわけにはいかない。いかに困難であろうとも、この惨状を言葉で表現する責任がある。ぼくは自分の内部にあるはずの言葉を搾り出そうとした。でもそれはなかなか出てこなかった。理由を考えた。もしかすると、ぼくは眼前の光景をただ眺めていたに過ぎず、実は考えていないばかりか感じていかなかったのではないか。感じることで自分も傷つくことを予感して、感性の回路を閉ざしていた気がするのだ。

書けないことの本当の理由

君たちの文章を読ませてもらった。見たことや体験したこと、そしてそこから考えたことを自分の言葉で表現することはたしかにむずかしい。自分の気持ちや体のリズムにぴったりくる文章はそうやすやすと書けるもんじゃない。それで、思うような文章が書けないときに、技術が未熟だとか、あるいは言葉が豊富ではないからなどと思ってしまいがちだ。でも、そいつはちがう。書けないことの本当の理由は、たぶん感じる力が不足しているせいだ。被災地でたじろいってしまったぼくのようにね。

それぞれの切実さ

小俣美紅さんの「夫婦—めおと—」は体験をした人でなければ書けない文章だ。ここには「世界」を自分に取り込もうとする人の息遣いが感じられた。中山知子さんの「日本美に住まう」は、研ぎ澄まされて感性が魅力的。世間の風潮に流されない姿勢は見事だ。川久保美桜さんの「リアルなリアル〜3.11以降のChim↑Ponにみるメディアとしての表現〜」は、震災後の私たちの社会の本質的な問題に迫っているこの問題意識を高く評価したいと思った。

傷つくことを恐れるな

そうだよ、この人たちの文章に共通しているのは、それぞれのテーマへの切実な気持ちであり、自分に対する不安でもある。しかし、むしろその不安をこそ表現すべきだ。真実はそこにある。そして、そういう自分を受け止めることが感性の回路を開くことになる。これはひょっとすると君たち自身を傷つけるかもしれない。でも、恐れちゃいけない、それは表現をする者の宿命だ。だって、言葉を失うよりは、そいつはきっと、はるかにましなことだぜ。

高校生に驚愕する

奥村 高明 聖徳大学教授

大まかに主題を決めて、材料を集める。内容を絞っていく。新しく調べることに気付く。また取材する。友達や家族、先生に相談する。その繰り返しによって主題が深まり、考えがまとまっていく。大賞作品はそれが最も優れていると認められたものである。

「夫婦—めおと—」は、撮影という行為を通して夫婦関係について考えている。出だしは弱い。明治の方が高かった離婚率や、実質的には戦後成立した一夫一婦制などに対する考察が不十分で、夫婦像が類型的だ。しかし、それを「三か月弱の撮影で約30組の夫婦の写真を撮った。」という実践が凌駕している。美術家は日々の現象に応じながら日常生活を研究する人だという指摘があるが、このことを高校生が可能にしている事実を賞賛したいⁱ。

「日本美に住まう」は、毎年帰省する祖母の家を見つめ直し、用の美について考えている。日本家屋の生み出す音、温度や湿気、光や色などの具体例と、それに対する感情や美術的な解釈、さらに先達の知見を加え、一つの論として破綻なくまとめている。考察は不十分だが、日本家屋を現代の社会問題として議論しようという試みもある。将来、このような生徒が社会を組み立てていくであろうことに期待を抱いた。

「リアルなりリアル～3.11以後のChim↑Pomにみるメディアとしての表現～」は、アーティストの実践を通して美術の在り方について考えている。3.11以降、信頼してきたシステムは疑わしくなり、マスコミの在り方も問い直された。大人たちは迷っている。高校生も同じ迷える当事者だ。その当事者が考え抜いて導き出した結論は、美術にはメディアとして存在意義があることだという。迷える大人の一人として素直に頷きたいと思った。

高校生ともなれば大人もかなわぬ知力や体力を見せるⁱⁱ。指導された先生は、生徒から問われ、戸惑ったことだろう。何より審査員自身勉強がまだ足りないと思省した。同時に「高校生を育てる「アトライター大賞」に参加できたことを喜んでいる。

i Helen Charman, Katherine Rose, Gillian Wilson: *The Art Gallery Handbook*, Tate Publishing 2006, ヘレン・チャーマン、キャサリン・ローズ、ジリアン・ウィルソン (編) 奥村高明・長田 謙一(監訳) 酒井 敦子・品川 知子 (訳) 『美術館活用術』美術出版社, 2012, 17p 印刷中

ii 100年前であれば15-18歳は教育されるべき対象としての「子ども」ではなく、立派に社会に貢献できる貴重な働き手としての「大人」だった。種としての人類として考えても十分大人である。彼らを「子ども」にしているのは現代社会に他ならない。

選考評

熊倉 純子 東京藝術大学教授

言葉は、造形のかたちとは違った意味で雄弁だ。

制作体験部門の言葉は、表現者たちの言葉である。すると素直に制作過程を述べた文章の達人も多いが、中にはごつごつと文がづづられたものもあって、そのリアリティが心に刺さる。時には作品の裏に渦巻く自我の鋭い刃をのぞかせたり、また時には右往左往する制作過程をユーモラスに語ったり、造形作品の背後にある表現者たちの一筋縄ではいかない意識の流れが、作者個人から発して作者個人に投げ返される過程がそのまま映し出されているのは、美術家たちの言葉に特有の魅力である。論理を超えて、妙に記憶に残る言葉があるのだ。

これに対して、作品探求部門の言葉は、言葉そのものが作品である。対象となる作品や事象を出発点として、どれだけ独自の世界を文章で描けるか、言葉は絵具であり文章は筆となる。言葉で造形を決って奥にあるものを見つめたり、形式で大胆な冒険をしたり、趣向を凝らした構成で鮮やかに場面を転換したりと、応募作品の多くが新鮮な風景を描いて読者を驚かせる。

芸術支援部門の挑戦は、文化批評の文脈に連なりつつ、やはり独自の世界を言葉で描く作品である。自分と芸術とのやりとりだけでなく、他者や社会の存在をどのように捉え、言葉の力でどんなヴィジョンを描けるのか、若い挑戦はどれも意欲的なものだった。

大賞を受賞した一人、小俣美絵さんの「夫婦—めおと—」は、こうした部門ごとの特徴を軽々と横断している点で、非常に現代的な論考である。制作部門の文章にしては珍しく、視点の中心が自己ではなく、他者との相互的なやりとりが写真作品そのものに反映されている。対話型の制作姿勢そのものが、現代美術的なものだ。文章は自然でなめらかな構成だが、内省的な世界に留まらず外界への働きかけがドキュメンタリー風につづられていて、映像のようなリアルさがある。そして制作の動機そのものが社会的だ。

社会的といえ、ひとつ全体に意外だったのは、入賞作には東日本大震災に触れたものがほとんどないことだ。そのなかで、もう一人の大賞受賞者の川久保美桜さんの「リアルなりリアル～3.11以後のChim↑Pomにみるメディアとしての表現～」は、大いなる意欲作と言える。

震災後の日本社会で芸術表現がいかなる意味を持つのか、十代の感性に重くのしかかる課題に、これからどのような模索が見られるのか、今後に期待したい。

アートライター大賞の選考を行って

守屋 正彦 筑波大学教授（芸術学専攻）

第4回となる高校生アートライター大賞は回を重ねるに従い応募総数が多くなっている。大変興味深いのは、美術作品の制作を行う視点、鑑賞する視点、あるいは美術を取り巻く環境について考える視点について、みずみずしい感性を持って素直に論述している点であろう。美術について、その事象について、文章で表現することは、単に美術品を制作したり、その美術品を感覚的にとらえて感動するだけでない、高校生ライター自身の主観的な感性を客観視して、叙述し、その思いが語られることになる。その知的な叙述は、表現を、あるいは表現されたものを、表現を取り巻く環境を客観的にとらえようとしているのである。

高校生の若い感性は見事に、一生懸命に叙述し、事象を確認している。そして、彼らが美術の様々な事象から受け取った感性を文章化し、どのようにか、読者に伝えようと文章で表現しているのである。ある学生は作品と向き合い、作品そのものから受けた作家の思い、その印象を自身の感性で受取る。またある学生は作品を理性的な視点で分析する。またある学生は十分に言葉で表現できない感覚的なものを、単なる叙述とせず、行間を開け、俳句や、詩がそうであるように、例えば、美術作品を言葉で再表現をしようと試みる。

わたしは、今回の応募において、これまでの常識にとらわれず、自分流に芸術的な文章で語ろうとするありかたに、もどかしくも「伝達したい」という強い思いを感じたのである。また、身近なこと、社会的なこと、未曾有の災難についても、若い感性が美術事象に題を求め、素直に反応したことに感銘した次第である。

今回のアートライター大賞への応募、アートライティングへの取り組みを思うに、周囲の熱意によって、高校生の才能がおのずと開かれて行くように感じたことである。

初審査所感

笹本 純 筑波大学教授（構成専攻）

初めて審査に参加させてもらいました。高校生らしい初々しく真っすぐな感覚でテーマや対象に迫る文章ばかりで、やや大げさですが、眩しさすら覚えました。大学の教員なので若い人たちとは交際があり、多少の理解を持っているつもりでしたが、より年下の皆さんの生活感や考え方に触れ、「日頃接している大学生たちはこういう所を通過して来てるんだ…そうかあ。」という発見をしました。新鮮な体験でした。

また一方で、文章表現や論理の組み立て方の面で、若いのが故の未熟さ・つたなさが見えてしまうこともありました。どの作にも、赤ペンで添削して戻してやりたいという気にさせる点が、多かれ少なかれ見受けられました。その手の訓練をする場がほとんどない現状を考えると、やむを得ないことなのかも知れませんが、ちょっと残念です。

以下、上位入賞作を中心に、印象に残ったものについて感想を述べます。

『夫婦—めおと—』は、長年連れ添った夫婦間の付かず離れずの微妙な関係をテーマに、公園で出会う老夫婦たちの写真撮るという制作経験をレポートしています。知らない人に声をかけて写真を撮らせてもらうことの難しさや、夫婦の間の「距離感」の成立ちについて理解を深めていく過程が分かりやすく表現されていて、好感が持てました。作品としての写真における肖像権の扱いについて、被撮影者の方々へどう連絡されているのかが、気がかりです。

『日本美に住まう』は、祖母の家を訪ねる体験の中で感じ取った、伝統的な日本家屋とそこで営まれる生活が持つ「美」について語ったものです。「用の美」や『陰翳礼讃』を踏まえた立論は必ずしも新しいものではないですが、若い世代がそういう「古典」を積極的に学び、それを踏まえて考えを深めていくことは大切だと思います。この面でも伝統は尊重されねばなりません。

『リアルなりアル』は、過激さをも孕む表現を通じて同時代の問題に密着したアートを追求するChim↑Pomの活動に注目し、「今のリアル」について考えようとしています。社会的現実の中に生きる者としての自覚に基づき立脚点を求めようという姿勢が、とても貴重だと思います。あえて言うなら、「目立つ」活動に含まれるマーケティング戦略の側面も見落とさないうで欲しいです。

他に『バク』『伝わること』『元気のぼりと園児が教えてくれたこと』などが印象的でした。『バク』の菅原さんには、「頑張ろうな」と言いたいです。『伝わること』と『元気のぼり』は、しっかりした素直な文章が気持ちよかったです。

高校生アトライターの皆さんへ — 指導者と教え子の間 —

鈴木 雅和 筑波大学教授 (デザイン専攻)

人には出会いと別れがあります。この原稿を書く1週間前、私にはひっそりとした別れがありました。最大の恩師である斎尾乾二郎先生です。奥様からの1枚のはがきでそれを知りました。本当に偉い人ほど派手な葬儀はしないものと、まさに先生らしい知らせ方だと思いました。皆さんの中にこの先生の名前を知っている人はまずいないでしょう。美術界ではなくて農学の先生です。

今から35年前、大学の農学部を出てから15年間、私はニュータウンの環境デザインの仕事をしていました。卒業後に始めて35歳まで、自分の趣味?で続けていた研究をある研究所で発表したところ、初対面のその先生から「君の発表を論文にしたら博士号をあげます。」と言われました。一介のサラリーマンにこのような出会いがあるのか?まさに夢のような気持ちになったことを思い出します。それからその先生の下で、研究を論文にすることをはじめましたが、直接、手取り足取り教えられたわけではありません。「指導」とはまさに「指して」「導く」ことです。卒論以来10年間、論文など書いたことのない私ですが、最初に提出した論文を見ておっしゃったのは「君、論文は本を書くのと違うんだよ。」という一言だけでした。後は自分で考えるしかありません。言葉の数は少ないほど、後まで良く覚えているものです。

皆さんは、色々な分野で多くの先生から教えを受けていると思います。「高校生アトライター大賞に応募してみたら?」という一言が、あなたの生き方を変えたことになるかもしれません。あなたに大きな影響を与える指導者に、もっと遠い将来に出会うかもしれません。必ずしもこのまま芸術の世界に進むとは限らないでしょう。そしていつか、あなたが指導者の立場に立つこともあります。それだけ皆さんには大きな可能性があるということなのです。

振り返って、あの先生がかつて示して下さったことを、今私に人のできているのか考えると冷や汗が出る思いです。ご遺族に、弔問、香典などの一切を遠慮するよう指示された先生に対し、私の悼みをどのように届けたいのか悩んでいたのですが、この場を借りて、若い皆様に先生への感謝の気持ちをお伝えすることで、それに代えようと思いました。皆さんも可能性を信じて、これからは好きなことを思いのまま追求し、表現して行ってください。

第4回高校生アトライター大賞選評

岡崎 昭夫 筑波大学教授 (芸術支援コース)

今回の最終選考に残ったエッセーの中で、大賞の3編はどれも多くの審査員が目にした作品です。

『夫婦—めおと—』は、「距離感」をキーワードに30組の「年を重ねた夫婦」にインタビューをして、今では珍しいフィルムカメラで2人の姿を撮影した記録です。高校生が街で見知らぬご夫婦に声をかけて撮影するまでのドキドキ感が読者によく伝わり、距離感や雰囲気はそれぞれの夫婦で異なってはいても、共に「幸せな表情」の大切さを自らの写真作品の中に見出しているところが読者を捉えます。

『日本美に住まう』では、夏に毎年家族で帰る祖母の家での居住体験を通して、気候や風土に即した日本家屋の合理性を発見した様子が報告されています。祖母が来ることを暗示する廊下からの足音、夏用の葎障子、日差しをさえぎるだけでなく庭と室内をほどよく区切る簾、「日本家屋のもつ濃淡のある陰翳」が引き出す絵画の微妙な表情。著者は、こうした伝統的な日本家屋の「用の美」を、大震災後の計画停電下の人工光のない東京においても再発見し、その美を現代の暮らしに導入することを提起しています。あらゆる芸術品を産み育てる建築の本質を居住体験から認識した著者の主張は読者を十分に納得させます。

『リアルなリアル』は、6人のアート集団「Chim↑Pom」が昨年5月、JR線の渋谷駅と京王井の頭線の渋谷駅との間にある岡本太郎作の『明日の神話』の右下隅の長方形の空白に、福島第一原発を思わせる絵を無許可で添付したゲリラ的事件を扱っています。その絵は原画と同じトーンで紙に描かれた絵を畳一帖ほどの塩ビ板に貼ったものらしく(<http://chimpom.jp/>)、水爆を浴びた第五福竜丸をテーマにした『明日の神話』が原発事故評価で最悪の「レベル7」を予言した功績を暗示するような題名となっています。大震災による原発事故により、電化製品の電気は各地の原発にリンクしていたことが人々に強く意識されたように、生物と環境に目に見えぬ放射能がリンクしている「現実の真実」を表現することにアートの社会的意義を著者は見出しました。この論点は、鋭く読者に切り込み、まさしく「メディアはメッセージである」というマクルーハンの理論を思い起こさせます。

これらのエッセーに加えて、「鬼の空念仏」という郷土の絵の模写の中に自己像を投影した『近江の美術を描いてみて』、「今と昔を繋いでくれるパイプ役」としての美術の作品制作によって辛い過去を乗り越えた出来事を記した『バク』、かつらのみが宙に浮く様を描いた作品の謎解きを「日常と非日常」の二つの反転する関係性に求めた『何かが違う?』、千切った錠剤のアルミ包装が落ちるかすかな音を友人と楽しむ幸せにアートの始まりを見出した『ささやかな楽しみ』などは、内省的な高校生の新鮮な息づかいを読者に感じさせました。

忘れてはならない大震災や収束しない原発事故を背景に、人間関係・生活・社会が芸術を通して問い直されたことが、今回の高校生アトライター大賞の特徴でした。

書くこと、読むこと、歩くこと

齊藤 泰嘉 筑波大学教授（芸術支援コース）

文章を書くことは、歩くことに似ている。人は、なぜ書くのか、歩くのか。書くことは、紙の上で歩くことだし、歩くことは、道の上で書くことだ。どちらも好奇心をサッカーボールのように蹴りながら、未知の世界をひたすら前へ前へと進めば良い。

「犬も歩けば棒に当たる」という言葉があるように、家の外に出て歩いてみれば、新しい出会いや発見がある。私が高校生だった1960年代末、寺山修司という詩人が若者をこう煽っていた。「書を捨てよ、町へ出よう」と。彼は、新しい時代の匂いを嗅ぎあてる猟犬だった。

今年も全国からたくさんのアトライティング作品が集まった。応募作を読みながら、大人の気づかない新しい時代の匂いを今回も味わうことができた。というよりも、読むことも歩くことに似ているので、読者の私は未知の世界をそこに探してしまう。

石川晴香（宇都宮中央女子高等学校）「何かが違う??」は、そうした私のわがままな好奇心に応えてくれる秀作であり、作者が美術館で見た謎の浮遊物の映像について書いた作品である。それは、読者を一気に笑いから思索の世界に投げ飛ばす。謎の浮遊物とは、青空に浮かぶ「かつら」のことである。「かつら」は飛ばないという「当たり前」を裏切るからこそ空飛ぶ「かつら」は新鮮だと作者は感じる。かつらのように軽く、哲学書のように重い意外性に満ちたエッセイとして印象に残る。

菅原光（熊本県立第二高等学校）「バク」は私小説のような自己分析が全体を貫き、文章が妙に大人びていて引き込まれて読んだ。「未練たらしな夢」などという演歌的投げやり気分と、過去に溺れる自分に「いい加減けじめをつけよう」というやり投げの決意が交錯し、絵をかくことで揺れながらも立ち上がろうとする心情が正直に告白されていて良かった。

小俣美紅（芸術総合高等学校）「夫婦—めおと—」は、まさに町へ出てこそ生まれたアトライティングである。夫婦の写真を撮り、二人の良さ「距離感」を探ろうとする作者は、「年を重ねた夫婦」をさがして公園に行く。いくら探究心があっても、見知らぬ人に写真を撮らせてくれと声をかけるのは勇気がいる。しかし、作者は、勇気を出し、「すみません」と言って写真をとらせてもらう。以後3カ月弱の間に約30組の夫婦の撮影をする。それだけでも作者の勇気と行動力に賛辞を送りたくなる。しかもその間に、「それぞれの夫婦の距離感や雰囲気」は異なっている、「幸せそうな表情」がすべての写真に共通して写っていることに作者は気づくのだ。この発見こそ「すみません」の勇気が導いてくれたものであろう。公園で行なった小さなアートプロジェクトの記録と考察として評価したい。

既成観念や過去への執着を捨てて歩いてこそ、見えてくる世界がある。ここに挙げた3点のみならず、アートについて書きながら自分なりの新しい世界を感じさせてくれる作品に心ひかれた。

1247粒の小石と対話する

直江 俊雄 筑波大学准教授（芸術支援コース）

「ことばのちから」という書き出しで始まる、オノ・ヨーコさんの作品に大晦日の新聞紙上で出会ったとき、私の目は、しばらく紙面から離れなくなりました。ちょうど第4回高校生アトライター大賞の企画を練っている時期でした。

「あなたのことばは 水に落とした小石が 世界中の海に ひゞくように 永遠に かけめぐるので。」（2010年12月31日新聞4紙掲載「新聞とことばのちからプロジェクト」より。）自分の言葉の力を信じようというこのメッセージこそ、アトライター大賞に取り組む若い人たちに、ぜひとも伝えてあげたい。日頃からクール（冷静）と言われる私には珍しく、熱い思いがこみ上げた勢いで「新聞とことばのちからプロジェクト」の皆さんと連絡を取り、この作品をアトライター大賞のポスターに載せていただけないか、無理を承知でお願いしました。同プロジェクトは、これまでも新聞紙上で重要な作品を発表することのあったオノさんに、全国紙を通じて広くメッセージを発信してもらおうと、広告や新聞に関わる有志によって企画されたものです。今回、この作品をポスターやウェブに掲載させていただけたのは、オノさんと、同プロジェクトの方々の深いご理解とご協力によるものです。心より御礼申し上げます。

自分のアートへの取り組みや、考えを書いた言葉など、広い世界の中で小石のように無力ではないかと感じることもあると思います。学校の先生に言われて宿題でなんとか提出した人から、自分でこのコンテストを見つけて孤独な中で書き上げた人まで、491編の応募には、さまざまな生きざまの断片が、凝縮されているように感じます。オノさんのメッセージは、高校生によるそれぞれの取り組みを静かに見守り、自分の力を信じるようにと、励まし続けてくれたように思えてなりません。

さて、受賞作から私の好きな作品を一点だけ紹介させてください。塚田涼香「そこにある」は、評価が分かれる作品だと思いますが、2005年に始まる第1回から合わせて1247編の応募作品をすべて読んできた私にして、自分Aと自分Bを対話させるという、脳内自分対話の形式で書かれたものとは初めての出会いであり、ウィットと含蓄を込めた文章を楽しませてもらいました。すらすらと苦もせず書かれたものか、周到な構想や推敲の上に仕上がった労作なのかはわかりませんが、この対話を未来の自分へのメッセージにしたいらしいことは伝わってきました。まるで、自分の頭の中に落とした二つの小石の波紋が、どんな風に広がっていくか、楽しんで眺めているようではありませんか？

すべての応募作品のことばのちからが、これからどんな風に広がっていくのか、私も見るのを楽しみにしています。

大賞 夫婦—めおと—

小俣 美紅 埼玉県立芸術総合高等学校 3年

「結婚はするよりも続ける方が難しい」という言葉をよく聞く。ある調査では、1990年から2000年にかけて急激に離婚件数が増えたという結果が出ていた。

では、どうしたら長年一緒にいられるのだろうか？そう疑問に思い、その理由の一つに「距離感」というものがあるのではないかと感じた。夫婦はもととはといえば他人同士である。自分勝手な言動はけんかの原因になる。しかし、気を使いすぎてしまっただけでは疲れてしまう。そこで二人のもっともよい距離感を保ち接することが大切である。

だが、まだ私は結婚したことがないので、距離感の保ち方がよくわからない。そこで、夫婦の写真を撮り、夫婦の「距離感」というものを探ってみようと考えた。というのも、私は高校三年間、写真を学んできたからだ。

大きく「夫婦」とは言っても、新婚のうちはまだお互いのことがよくわからないだろうと思い、長年つれそっている夫婦を撮ることにした。年を重ねた夫婦には、共通点があるとわかった。多くが老眼鏡をかけている、そして白髪であるということだ。この共通点を基準に夫婦を探した。

まずは、大勢の夫婦がいそうな場所を考えた。最初に思いついたのが近所の大きな公園だった。案の定、散歩をしていたり、花を見ていたりしている夫婦が大勢いた。

カメラを首からかけ、インタビューを書き留めるノートとペンを持ち、準備は万端であった。それが、いざ話しかけようとする、これが予想以上に緊張するものであった。まずなんと声をかければ良いのだろうか。怪しまれないだろうか。無視されてしまわないだろうか。さまざまな不安が頭をよぎった。

撮りたい夫婦がいると、すこし距離を

置き後ろをついて歩いてはまた元の場所に戻る。そのようなことを繰り返していた。ふと、このようなことを繰り返している方が怪しいのではないかと思った。第三者から見ればとても不審な行為だ。そこで、歩いている人に話しかけるのは無視されてしまうような気がしたので、まずは座っている人に話しかけることにした。

「すみません。」勇気を出して言った一言目。

「お二人の写真を撮らせてもらってもいいですか。」

返事が返ってくるまでのたった1、2秒が、とても長く感じた。

「いいですよ。ぜひ。」笑顔でおじさんが返事してくれた。その隣でおばあさんが笑顔でうなずいていた。その瞬間、体中に安心感がたちこめた。しかし、写真を撮るまでは気が抜けない。フィルムカメラなので、絞りやシャッタースピードは自分で調整する。その日は曇っていた。そして場所が木の下だったということもあり、なかなかちょうどよい値にできなかった。この時の反省を生かし、このあとはシャッタースピードを一定にし、絞りだけで調節できるようにした。この工夫により、シャッターをきるまでのスピードが速くなり、笑顔を保つ時間を短縮できた。一枚だけではピントが合っていなかったり、現像がうまくいかなかったりとさまざまな心配があるので続けて2、3枚撮らせてもらった。

完成したのが右上の写真(図1)である。初めてにしてはピントが合っていて、表情がよく、満足のいく一枚になった。

写真を撮ったあとはインタビューをし



『夫婦—めおと—』モノクロ、パライタ紙(図1)

た。「距離感」を意識したことがあるかという質問をした。すると、おじいさんが

「こっちの方が意識してるんじゃないかあ。」と言っておばあさんの方をちらりと見た。おばあさんは

「あまり意識はしないがねえ。生きやすいように、仕事しやすいようにしてたね。」

と言った。

そのあとも撮影を続けた。すると、距離というものは意識的に保っているものではなかったのだ。距離といっても目に見える接近距離ではなく、心と心の間にある心の距離である。心の距離は目に見えない。なので、距離というものは意識的に測るものではなく、長年の感覚で無意識的に測るものなのだ。

私は三ヶ月弱の撮影で約三十組の夫婦の写真を撮った。全体の写真を見てみると、それぞれの夫婦の距離感や雰囲気異なっているのがわかった。反対にすべての写真に共通しているものをみつけた。それは幸せそうな表情だ。写真を見た人が、どこか和やかな写真だと思ってくれたら嬉しい。

私は疑問を感じ、行動することで疑問を解決できた。ここで写真は、疑問を解決する良い手段となった。これは写真のみならず、芸術作品全体に言えることだろう。これからも何かに迷ったり、疑問が浮かびあがったら、まずは行動に移そうと思う。

大賞

リアルなリアル～3.11以後のChim↑Pomにみるメディアとしての表現～

川久保 美桜 大阪府立港南造形高等学校 2年

3月11日。この日を境に私たちのリアルは大きく変わってしまった。自分には一体何ができるのだろうか、何をすべきなのだろうか。ことにアーティストたちは自分たちの表現と、社会が求めるものとの間で葛藤があったことだろう。アートに何ができるのか、アートに力はあるのか。アート作品を売りその収益金を寄付する活動は着実に復興への手助けをしている。しかし本来、アーティストたちが出来ることはこれだけではない。考えたこと、見たこと、聞いたこと、感じたこと。様々な情報を表現することだって可能だ。しかし今、そうしたリアルはアートにとって、日本にとって、世界にとって、必要なのだろうか。

現在東京の渋谷駅に展示されている岡本太郎の壁画「明日の神話」に5月1日、何者かにより、新たに絵が壁画に貼りつけられていた。その絵には、元の「明日の神話」に自然に繋がるように岡本太郎風のタッチで4つの建物が描かれており、そのうちの2つは鉄骨だけになっている。そしてそこからは不気味な黒煙が立ち込めており、どうやらその建物は爆破したものだと分かる。そう、それは震災による福島第一原子力発電所事故を描いたものだ。それは1日たつてから撤去され、しばらくのち行ったのは現代美術集団Chim↑Pomであると判明した。Chim↑Pomは男女6人で結成され、現代社会の問題を過激に取り扱った作品で知られ、彼らの作品は常に賛否両論をかもしている。そんな彼らが震災を受けた後に行ったのがこの、「LEVEL7feat.『明日の神話』」である。「明日の神話」は岡本太郎が広島・長崎・第五福竜丸への核による恐怖の瞬間を描いた巨大壁画だ。しかし描かれたのは単なる核への恐れだけでなく、岡本

太郎の生命に対する尊厳が叫びとして存在している。しかし、Chim↑Pomはそんな岡本太郎の作品に新たな叫びを付け加えてしまった。まだ解決されていない福島第一原発事故に対する恐怖、怒りの叫びである。

これは賛否両論を巻き起こし、テレビでも報じられた。彼らの作品は常にセンセーショナルで批判を受けやすいのは当人たちも承知であり、これは悪質なたずらで落書き、アートではないと批判された。彼らは傷がつくかも知れない本物に絵を貼り付け、またその後、軽犯罪法違反で書類送検されてしまい悪質ではあったのは確かだ。しかし批判されたのはこの事からだけではない。彼らを芸術家集団という自分たちとは世界の違う特殊な人間だからという前提をもとに一種の差別的要素を含み批判された。確かに彼らはアーティストの中でも、特に奇抜な作品で知られる。しかし彼らはこの一般社会から離れた存在ではない。彼らの作品は一見はふざけていて身勝手なものに見えるが、それらには常にこの社会上に存在する生と死が絡んでいる。実際にこの「LEVEL7feat.『明日の神話』」は核の脅威とそれに対する生命への被害の恐怖という現状に起こっているリアルを表している。彼らは同じこの社会に生き、その社会を切り抜き、社会を表現しているのではないか。

そういった事を踏まえると、彼らはマスコミと似ていると思う。今回の騒動ではまずChim↑Pomが行動を起こし、マスコミはやや批判的な報道をし、Chim↑Pomとマスコミとは正反対の位置にあった。しかし、これは表面上の見方であり、その本質、つまりChim↑Pomが表現した本来の意味を取ると、実際に被災地に行き、取材した彼ら

が見た真実を伝えようとしたことになり、これはマスコミのしていることと元は同じであると思う。ただ違う点はその情報を媒体するメディアの違いだ。アート表現をメディアとした場合、多くの人々はどうしても通常のテレビ、新聞などのメディアと分け隔てて見てしまい、その本質を見抜けなくなりがちになる。それが今回批判された原因だろう。そしてその後行われた「LEVEL7feat.『明日の神話』」を含めた3.11をテーマにした展覧会「REAL TIMES」に展示された作品達はどれも彼らの目を通し見えた、このリアルな真実なのだ。例えば「被曝花」は福島第一原発から30キロ周辺に生息していた植物を除染し制作した生け花で、逃げることの出来ない植物たちがただ放射能をうけながらも生きていく様を伝えている。人間だけが苦しんでいると思いがちだが、植物も被災していることを気づかせてくれる。また、被災地に取り残された犬の写真もあった。彼らは人だけでなく植物や動物にも視線を向けた。それらは偽りの無い事実であり、リアルなのである。

ただ事実を述べ伝えるだけでは人の心は動かない。真実は時にはアートという人の感情を介したメディアを通してでしか分からないことがある。身の危険に晒されながら彼らが見たリアルは、ただのいたずらで済ませていいものか。Chim↑Pomがいくら叩かれようが、彼らが目にしたリアルは真実であり、そこに目を背けることは出来ない。今のリアルが分からなくなった日本には、このようなアートこそが必要なのである。

ギィと音を立てる扉を開き、門をくぐる。玄関から入っても、庭から直接、客間にまわっても良い。少し迷ったのち、戸をガタンと滑らせ、玄関から屋内に入る。静寂に、心が引き締まる。耳を澄ませば、セミの声だけが、しんしんと響いている。

私には、夏に帰るところがある。毎年、家族で祖母の家へ参るのだ。私はそこで、日本家屋の美しさを知った。幼い頃から無意識のうちに触れていたものなのに、毎夏、姿勢を正したくなるほどの感動を覚えてしまう。家の空気が、私にそうさせるのだ。

廊下を小走りする音がする。足音は次第に大きくなり、祖母が現れる。しばし休憩の後、皆でお茶室へ向かう。でも、今日は客間にしようか。夏用の葦障子は目にも涼しい。少し巻き上げた簾から覗く、庭の緑は青々としていて、今は夏だと、私に実感させる。

夏は暑い。しかし、日本は、古くから暑さを和らげる工夫を欠かさなかった。浴衣などの衣服、涼感を誘う食事もそうなのだが、それは日本家屋に、人々が住まう場所に、最もよく表れていると思う。私が夏にここを訪れる理由は、そこにもある。夏には薄暗い室内と、庭の緑の対比がことさらに美しい。加えて、簾により視線が限定される。画面いっぱいの絵も美しいが、小さな絵に、区切られた美しさに、額縁をはみ出さんばかりの感動を覚えることもある。少し巻き上げた簾は、畳に座った人の目線にぴたりと合うフレームを、庭に与えるのだ。その上、日差しを遮るという工夫までなされているのだから、日の眩しさを気にする

ことなく、緑を眺めることができる。

ここに、私は日本の「用の美」を見る。昔の日本人は、「用」のなかに「美」を見いだすことに秀でていたのであろう。衣食住どれをとっても、こんにち日本美といわれるものには、必要以上の働きも、過剰なまでの美しさも存在しない。絵画も然り。最近、絵画は美術館で見られることが多いためか、一般には見られること、描かれることのみがその「用」として考えられがちである。しかし、絵画はもともと、家の壁にあってこそそのものだと思うのだ。絵画は、日常の中にあつてこそ、その本来の「用」をなすのだと、私は考える。それには、ただ壁を飾るだけにとどまらず、場の空気をも変える力がある。例えば掛け軸は、床の間で客人を迎え、会話の題材にもなり、主人と客人を取り巻く雰囲気をも左右する。ただ見られるだけ、個人のうちに感情を巻き起こすだけが、絵画の「用」ではないのだ。

さて、日本家屋は絵画をどのように包容するのだろうか。絵画が日常の中でこそ、本来の「用」をなすのだとすれば、その「美」を、日本人の日常の舞台となった日本家屋は、どのようにして引き出すのか。これには、谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』が答えてくれた。西洋を「光」の文化とするならば、日本は「陰翳」の文化をもつ。日本家屋のもつ濃淡のある陰翳こそが、絵画の美しさを引き出すのである。その作用には無駄がない。スポットライトのように、光を絵画に当てすぎることではない。必要以上の「用」をなさないのもまた、日本家屋の美点である。

未曾有の大震災のあと、東京の街は静けさに包まれた。ぎらぎらと光っていた蛍光灯は影を潜め、家々では電気機器へ

過度に頼らない生活が営まれている。朝、街は日の出と共に眠りから覚め、夜、夕闇とともに床に就く。しかし、人為に頼りすぎることのないこの生活は、初めてのことでない。日本人が古くから営んできたものである。近代に入り、西洋化のもとで光の浸食を受けたかに見えた日本の陰翳は、残っていたのだ。

「用」のみに終わらず、日常に「美」をもたらす日本家屋の伝統は、今日の大都市にも、そこに生きる人々の内にも、現存するのだ。

たしかに、都会の家々に伝統的日本家屋の「用の美」を適用させることは不可能だが、その美意識を忘れずに保持することは可能である。先に挙げたように。東京における陰翳という点でもそれは証明された。そこで私は主張したい。日本美に原点回歸せよ、と主張したいのだ。「用の美」はつい忘れられがちだが、時には、その美しさに浸かり、自らの原点である日本の美しさを捉えなおすことも必要である。私の場合は、祖母の家で過ごす時間がそれにあてはまる。ほの暗い室内から庭を眺め、部屋を包み込む美しさに感銘を受けたことは幾度だろうか。しかし、日本美は、日本家屋のみが体現可能なものではない。近代的な暮らしにおいても、取り入れることはできる。夏ならば、簾や浴衣、打ち水があげられる。日常に「美」を取り込むことは、それが何らかの「用」をなすならば、可能なのだ。日本美を日常的に意識し、毎日の生活に取り入れることこそが、日本の芸術性を保持する上で最も大切なことだと、私は考える。

《参考資料》

谷崎潤一郎『陰翳礼讃』（中央公論社、1995年）

優秀賞

何かが違う??

石川 晴香 栃木県立宇都宮中央女子高等学校 1年

高校入学して最初の夏、美術館で行われていた展覧会でこの作品と出会った。前もって調べていたわけでも、それが目当てだったわけでもない。数多くの素晴らしい作品の中で、圧倒的なインパクトと芸術性を感じた。ただ、私とその芸術性の深層を理解するためには時間がかかりそうだ。

・・・その浮遊物は、廻り続ける。廻って、廻って、ふと気づくとプツンと何かが切れたかのように落下する。そして重力に逆らうようにして、浮き上がってはまた廻る。

作品名を知るまでは、その浮遊物の正体がわからなかった。

その名は、「かつら」。図1

そして、その「かつら」というシンプルな題名から、私の中で何かが生まれた。それが表情として真っ先に表れたのが「笑い」だった。可笑しい。ただひたすら、可笑しい。日常で考えて、まず「かつら」が宙に浮いているなんてあり得ない。ましてや、廻って、落ちて、浮く、なんて。しばらくすると、笑いの次に、「謎」が生まれた。私にとっては、かつらを題材にすること、かつらの意味すること、かつらをどのようにして動かしているのかということ、何もかもが「謎」で満ち溢れた。私が見た作品の中で、この作品は群を抜いて、意味が分からない。作者である田中功起さんの、思い描く風景を、私は知りたくなった。

そこで、私はその意味の分からなさに、理由をつけてみた。これはきっと、日常的ではなく、非日常である、と。

私の考えは、日常的であれば、従来、かつらは人の頭の上に着けることが当たり前である。それが非日常、要するに田中さんの思い描いている風景では、かつらは宙に浮いていてもおかしくない、と

いうことである。しかも、田中さんはそのかつらに、宙に浮く以外に、廻る・落ちる・浮き上がるという動作を投影していた。動くはずのないものが動くこと、それがどれほど可笑しいことだろうか。

私にとっての非日常とはどんなものだろう。きっと、物理的に不可能なことが可能になったことだけではないのだと思う。帰り道に、いつもの道ではない道を通ってみたり、今まで話したことのない人と話してみたり、自動販売機で飲んだことのない飲み物を買ったり。こんな他愛もない、小さな変化でも、昨日までの日常とはまったく違う世界になる。言ってみれば、少しだけ何かを変えてみれば、非日常になり得てしまうということ。

そう思うと、少し可笑しく感じてしまう。無数の選択肢が存在するとして、私が選べるのはただ一つだけど、それ以外の選択肢も個々として在り続ける。たとえば私が「かつらは浮かないのが当たり前」と選択してしまえば、かつらは浮くことはないだろう。けれど、「かつらは浮くのが当たり前」という選択肢を選べば、もしかしたらかつらは浮いていたかもしれない。そうやって物事を決めつけてしまうことで、何かを無くしてしまっている気にさえなるのである。そして、それに相対して「裏切り」をととても新鮮に感じるのだ。

人間の想像力は、とても規模の大きいものである。ただ、その半数は「日常」からできており、決めつけによって成立している。しかし、半数は「非日常」であって、見境なく「裏切り」を求めている。今日までの発明品は開発者の日常の裏切りによって成し得たものだ。大昔に、だれが、今のような生活ができて当然だ、と考えたであろうか。それは、

「当たり前」を裏切ろうという、強い信念と並々ならない努力から生まれたのである。かならず、この先の遠い未来に、今の非日常が裏切られる日が来るだろう。私が、かつらは浮いていることが可笑しい、と笑っていたこと自体が、不思議に思われてしまうような時代が来るかもしれない。そのような未来が来る前に、私はこの作品と出会えてよかった。この作品の面白さに触れることができている。私にとっての、この作品に感じる面白さが、たとえ、作者にとっては氷山の一角であり、深層ではないとしても。逆に、かつらが浮いて、廻り続けて、落ちてはまた浮くことに、特に深い意味を持っていなくても。

私は今までを通して決意したことがある。

せめて、かつらが浮くのが可笑しい、面白い、と感じなくなってしまう未来が来るまで、絶対にこの感情は忘れないでいよう、と。

著作権保護のため図を省略
(高校生アトライター大賞選考委員会)

図1 栃木県立美術館「画像進化論」
2011/7/23→9/19 カタログ p.98
田中功起 かつら 2003 DVD

優秀賞

ささやかな楽しみ

伊藤 はるか 北海道札幌平岸高等学校 3年

ささやかな楽しみは世の中に溢れている。

多くの人が共感するわかりやすいものも、ごく少数の人しか知らないマニアックなものもある。いずれにしてもそのスケールは小さく、時には笑ってしまう程に馬鹿馬鹿しいことがあるけれど、しかし確かに誰かの心を和ませ続けている。

あなたにもそんな楽しみがあるはずだ。

私はそれをアートの原点の一つと考えることに異議を唱えない。

つい先刻、ある友達と、私の楽しみを共有することができた。

昼休みのことだ。教室で弁当を食べ終わってから、彼女は2、3の錠剤と水筒を取り出して机に置いた。錠剤はアルミ箔と透明樹脂による一般的な容器に入っていた。私が見ているうちに、押し出された中の錠剤がアルミ箔を突き破って彼女の手の上に転がる。その瞬間に容器は不要物と成り果てた。役目を終えて、無惨な姿で机に残された。

放っておくと、このままゴミ箱に投げ込まれるのだ。

一つの考えが浮かんだ。私は彼女が薬を飲む間に空になった容器を拾い上げた。そうして引き裂かれたアルミ箔に慎重に手をかけ、透明樹脂の部分からそれをはがし取った。

はがすところが無くなるまで続けた。無

くなったら、他の容器で同じことをした。とにかく量が欲しかった。手の平にたくさんの欠片が集まったら、千切ってもっと小さな欠片に変えた。

その時には、彼女も既に薬を飲み終わっていた。

机から15センチくらいの高さに欠片を持った手を運ぶ。私は彼女に、「見て」と言って手の平をひっくり返した。アルミ箔の欠片はすべて机に落ちてそれきりだ。

「え、何？」

彼女は、わけがわからないという表情をした。仕方がないことだった。見て、と言ったものの、視覚情報なんか問題ではないのだ。散らばったアルミ箔を集めて、私はもう一度それを空中に持ち上げた。

「音だよ。よく聞いてて」

私は手を放した。

——からん

彼女は、あっ、と呟いた。耳をすましてやっと聞き取れるような高くて小さい音だった。

これが私の楽しみだ。錠剤の包装に使われたアルミ箔をはがして、落ちる音を楽しむ。微かだけれど綺麗な音が鳴る。小人の鉄琴みたいな音が鳴る。何度でも何度でも、薬を飲むほど体調が悪い日は、この音色が私を癒してくれたのだった。

彼女は、友達は、アルミ箔が奏でる音を聞いてくれた。それが嬉しかった。彼女との距離がほんの少しだけ縮まったような気さえた。自分だけのひそかな幸せを誰かと分け合うことが、また小さな幸せになった。

このことはアートやデザインに置き換えてもいえることだ。一人の世界を満足させるためにものを作るのだって素敵なことだけれど、それを他人と分かち合えたならもっと素敵ではないだろうか。世界が広がる場所に喜びを感じられるのではないだろうか。

だからこそ、ささやかな楽しみとアートとの間に私は繋がりを覚える。

私たちはささやかな楽しみに囲まれている。それらが与えてくれる幸せはアートの始まりだ。楽しみを見過ごさず大切に、そして人と一緒に楽しむこと、それがアートをより身近なものへと発展させる助けになるのかもしれない。

音を楽しんだ後のアルミ箔は当然捨ててしまったが、それもささやかであったがために許された気軽さだろう。

優秀賞

近江の美術を描いてみて

伊藤 大晃 滋賀県立膳所高等学校 1年

私は中学3年のころ、美術の時間に大津絵について学び、その中の「鬼の寒念仏」を実際に色紙に描いたことがある。

大津絵とは、東海道五十三次の宿場の天津宿の東のはずれと京都の山科との境にある追分や大谷で売られていた名産品である。大津絵は1624年～44年頃に誕生したといわれていて始めは神仏をテーマとした仏画から世俗画、諷刺や滑稽に変化していき最終的には実用的なお守りとして手間を省かれるようになっていったらしい。大津絵は既に描いたものを売るのではなく、注文を受けてその場で描くという今でいうオンデマンド方式が使われていたようだ。有名な大津絵は「鬼の寒念仏」、「藤娘」、「外法と大黒の梯子剃」、「弁慶の立ち往生」などがあろう。

その中で私が描いた「鬼の寒念仏」とは鬼が僧衣をまとっている絵で慈悲ある姿とは裏腹な偽善者を諷刺したものと呼ばれている。だが、私は「鬼の寒念仏」を見た瞬間、違和感を覚えた。確かに鬼が僧衣をまとおうというなんともおかしな姿をしている。しかし、私は偽善者を表す鬼というからには、いかつく恐ろしく目がつり上がっているような顔をしていると考えていた。だが実際の鬼は偽善者を表しているに足らず顔がそれほど荒々しい顔やひねくれた顔をしているわけでもなかった。目も大きくてどこか落ち着いている印象を受けた。さらに、片方の角、牙がそれぞれ折れている。「どうして偽善者を表している鬼なのにそれほど怖い顔をしていなくて、角と牙が折れているのだろうか。それとも江戸時代ではこれが恐ろしいイメージだったのだろうか。」と疑問を感じた。

しかし、大津絵の説明を聞いたときその疑問が解けた。この鬼の住まいは人の心の中で鬼の折られた角は仏の教えである三毒と呼ばれる人々の我見我執を表している。そして人は自分の都合で物事を考え、自分の目だけでものを見て、自分にとっての欲しいもの、利用できるもの、

自分だけにより良いものと限りなく角を生やしていく。大津絵の鬼はそれを折ることを教え、鬼からの救いを表してもいる、ということであった。この話を聞いてなるほど、と感じた。鬼は偽善者も表しているがそれだけではなく、もともと悪人だったが、そこから反省して自分の角を折り、善人になるために努力している人のことも表しているということだろう。だから鬼の姿はしているが、荒々しい顔をしているのではなかったのだと思う。

実際に授業で描く前に、先生は「大津絵は描いた人の心の姿が表される。」といていた。私はこの話を聞いた時、「そんなの当たり前ではないか。真剣にする決意したらうまく描くことができ、適当にすれぼうまくはならないことと同じことだろう。今まで通り普通に描いていけばいい」と考えた。しかし、いざ描き始めると全く思っていたとおりの線が描けなかった、もちろん、普段は絵具と筆で描いていたため、大津絵に使った筆ペンになれていなかったのもある。だが大津絵は前の授業の時に練習で一度描いた。でも、大津絵は練習で描いた絵よりもひどくなっていた。人を嘲るような顔をしていてどこかひねくれている鬼ができあがった。(図1)

先ほどの説明で自分が考えた鬼のように、偽善者のようで、反省せず角と牙を折っただけでまだ角を作りだそうとしている鬼のようであった。「いったいなぜこのような作品になってしまったのだろうか。自分ではちゃんと真剣にとりくんだつもりだったのに。もしかしたら、先生のいていた通り大津絵は人の心が表されるのだろうか。」と考えた。

もしも大津絵が人の心映すのならば、私はひねくれている偽善者のような心を持っていることになる。確かに、私は先ほどの先生の発言に対して、素直に聞こうとはしなかった。



図1 色紙 鬼の寒念仏 2010年

それに私は嘘をつくことが多く適当にその場を取り繕う。この点では偽善者と同じだろう。「今ごまかせればそれでいい。」というように考えることも多々あった。自分が描いた絵を見て思ったことと自分の本当の姿がほとんど一致していた。今思うと私は幼少時から人に叱られても反省したふりをすることが多く、いつも同じ事を繰り返して怒られていた。その時の状況で適当に言いつくろい、その場から逃げて楽な方向に進むことが多かった。鬼の角が表している我見我執は子供のころから自分の心にあった。この自分が描いた鬼のように折っただけで自分の行いや態度を改めようとはしない心を持っていたのだろう。

近江の文学によって映された自分の心の中の鬼は、折ったふりをしているだけでいまだに角が折れていなかった。自分はその時ようやく角を折る決意をした。次に大津絵を描く機会があるのならば、その時には角が折れていることを願う。

引用・参考資料

風刺画 鬼の寒念仏 (http://www.otsue.jp/images/g_detail/oni_sikisi.html)

大津絵とは 大津絵の情報サイト 天津舎 (<http://ootsue.com/design/ootsue.htm>)

大津絵の歴史 大津絵の情報サイト 天津舎 (<http://ootsue.com/design/history.htm>)

優秀賞

「秋葉原」という街

植竹 茉奈 東京都立工芸高等学校 2年

私は秋葉原が好きだ。こういって、とある人は私のことを「サブカルチャーに異常な執着を持つ人」だと思うかもしれない。もしかすると嫌悪感を抱く人まで出てくるかもしれない。

秋葉原という街に対して、人々は「電気街」やアニメ・漫画・アイドルなどの「サブカルチャーの聖地」というイメージを持っている人が多い。

しかし、私がここで言いたいことは単に「サブカルチャーが好きだ」ということではなく「秋葉原という街が持つ独特の雰囲気が好きだ」ということである。

では、独特な雰囲気を持つその街のどこに、私を引き付ける魅力が潜んでいるのであろうか。

世界にはNYや渋谷、パリなどといった人々とアートの交流が盛んに行われている街が数多く存在する。秋葉原という街もその中の一つではあるが、他の街と比べると非常に特異な存在である。

世界中にある芸術活動が盛んな街というのは、各自の異なった表現を使用し、自己表現・調和・機能美・空間演出などの異なった目的を持って芸術活動を行っている。そのため、これらの街の大半が「全体の一貫性や統一感に欠けた街」や、全体の調和を目指した末に「変化に乏しい街並み」ばかりになってしまっている。

しかし、秋葉原で行なわれている芸術活動は全て「自らの宣伝」という共通の目的の為だけに行われているのだ。さらに、それらの活動が盛大に、それも一切自粛することなく巨大なロゴマークやイラストレーションを掲げ、映像や音楽などを大画面かつ大音量で路上に向け流しているのである。



電気街（歩行者天国）

これらの過剰とさえ感じる宣伝を街全体で行うことで、秋葉原という街は光と音楽とヴィジュアルデザインで満ち溢れた秋葉原独特の雰囲気形成しているのだ。

一見すると街が混沌としそうな宣伝方法ではあるが、それらの宣伝内容の大半をアニメやゲーム、イラストレーションが占めているため、街全体を見渡すと不思議な統一感を生み出している。その統一感は、調和を一切気にすることなく各自の持つ最大限の力で宣伝を行ったことにより生まれた「偶然的調和」。秋葉原が形成するその調和に、私はデザインではない、おびただし数の細胞によって構成された一つの生命のような芸術性を感じているのだ。

私にとって秋葉原とは、その街全体が一つの芸術作品なのである。

秋葉原という芸術を成立させるのに、“人々”の存在は必要不可欠だ。なぜならば、秋葉原の人々の服装や手荷物でさえも、秋葉原という芸術を構成する重要な要素であるからだ。

私が秋葉原を訪れた際、そこでは日曜日に毎週実施されている歩行者天国が行われており、電気街には車ではなく人々が道路を闊歩していた。

しかし、その日はどこか、街が閑散としていたのだ。人が少ないわけではなく、かといって、街に溢れる広告が盛り上がり欠けているわけでもない。

疑問を解明しきれないまま、私は後日、もう一度秋葉原を訪れた。

二度目に秋葉原を訪れたその日、歩行者天国の秋葉原では大きなイベントが行われているらしかった。

私は驚愕した。その日の秋葉原は、前回訪れた時とは比べものにならないほど大勢の人々でごった返していたのである。単にデザイン性の高い建物が立ち並び、洗練された装いの人々が街を闊歩する風景など世界に数多く存在する。しかし、そこに存在していたのはコスプレヤーや、アニメグッズを用いたファッションの人々、イラストの描かれた巨大な紙袋を手に行列に並ぶ人々であった。それも、人々で混沌としながら街の全てが今回のイベント一色に染まっていたの



AKB劇場前（歩行者天国）

である。

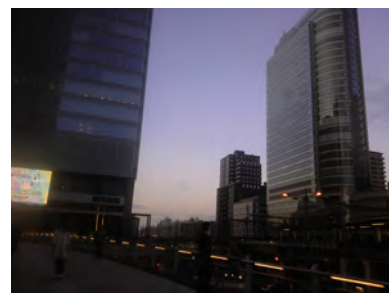
その時私は確信した。秋葉原を構成する「偶然的調和」とは、秋葉原の建物だけではなく、秋葉原を訪れる人々があって始めて完成するものであると。

芸術の領域はとてつもなく不明瞭である。しかし、あるものに対して誰かが美を感じた瞬間、それはたちまち芸術へと姿を変える。不明瞭であるからこそ、芸術には無限の可能性があるのだ。

美を見出すことは人々にしか出来ない。

もしも人々が「芸術表現は有限である」と感じているのであれば、それは人々が固定観念に囚われて新たな美を見出すことが出来ていないだけなのだ。

私は秋葉原が好きだ。私は秋葉原という街を訪れて、秋葉原という街そのものに美を見出した。様々な芸術作品で満ち溢れた、街の在り方そのものに。



秋葉原UDX前

写真資料情報：秋葉原の風景（撮影：植竹茉奈）

優秀賞

「写実」である理由

大谷 友子 神奈川県立相模大野高等学校 2年

「そこまでリアルに描くなら、写真で良いじゃん。」

「ホキ美術館」を訪れる数週間前に言われた、友人の台詞が忘れられない。

「写真」は、カメラや携帯電話などを使って、遭遇した場面や出会った景色を一瞬で一枚の紙、もしくは一枚の画像として未来に残すことができる。また、現在では誰でも簡単に作ることが可能だ。絵画や彫刻よりも短時間で完成することが出来る上、日常生活から戦場まで多方面で活躍する。私的にも世界的にも欠かせないものだろう。そんな便利なものが存在するのに、なぜ写真のように絵を描く「写実」絵画が存在するのだろうか。なぜ、わざわざ写真を真似て絵を描くのだろうか。

著作権保護のため図を省略
(高校生アートライター大賞選考委員会)

原雅幸「光る海」
2010年制作 ホキ美術館所蔵

黒を基調とした最後のギャラリーで、光は絵だけに向けられていた。ギャラリーの照明の光、絵の中の太陽の光、海の光など、原雅幸の「光る海」はたくさんの光に溢れていた。それが、私が初めてこの絵に出会った時の最初の記憶である。よく見ると、枝の一本一本、葉の一片一片、光と影、これら全てが写実的に描かれている。もちろん写真ではない。

「光る海」は原が学生時代に見た大阪近郊の農村の風景である。その風景を2010年に遠い異国の地で当時を思い返しながら描いた作品である。

「光る海」には、原が学生時代にこの風景に出会った時の感動と、何十年も後にあの風景を懐かしむ気持ちが、時間を隔てて込められている。しかし、人の感情が無数にあるのに対して、写真が切り取れるのは何年の何月の何日の何時何分何秒の一瞬であり、違う感情で同じ一瞬を切り取ることはできない。

時間をかけて切り取られた「光る海」の風景は、また他の人間が時間をかけて開発を進め、現在は街になってしまった。もう、この風景に出会うことはできない。その風景を正確に緻密に写実的に描くことで、この絵の前に立った時、いつのまにか原がこの風景に出会った時と同じ位置に立っているような気持ちになるだろう。まるで、タイムスリップしたように。そこから先、この風景をどう思うかは人それぞれだ。枝も草も影もリアルに描くことで原は、自分が感じた感動を伝えても、決して押し付けるようなことはしていない。色使いを喜怒哀楽に任せて描いたとしたら、作者の感情が前に出すぎて、風景の本質は見えなかったかもしれない。

つまり、「写真」と「写実」に拘らない絵、それぞれに出来ない“時空の操作”が「写実」絵画では可能である。また、ホキ美術館で聞いた「光る海」の解説テープで、原は風景画についてこのように述べている。

「風景画にとって一番大事なものの、それは思い出だった。」

ただ何となく写実的に風景を描くなら、私の友人が言っていた方法が良いだろう。風景の本質的美しさを表現する「写真」の力、作者の無数の思いも伝えることができる「絵画」の力。この両者の力を借りて、再びこの風景に出会うこと。これが「写実」である理由だと、私は感じた。

「光る海」は生きている。たくさんの光に溢れて。

画像引用
えきねっと (JR東日本) | 千葉県の祭り・イベント
http://tabidoki.jrnets.co.jp/chiba/matsuri_05.html
2011年10月6日アクセス

優秀賞

芸術におけるコンテクストを見つめ直す

—「ミンウォン：ライブ・オブ・イミテーション」展

木村 文 渋谷教育学園幕張高等学校 3年

ミンウォンという芸術家がいる。ベルリンを拠点にするシンガポール人であり、第53回ヴェネチア・ビエンナーレで審査員特別賞を受賞した気鋭のアーティストだ。彼の日本で初めての個展「ライブ・オブ・イミテーション展」は2011年6月25日から8月28日にかけて東京都品川区の原美術館で開催された。

美術館全体にわたる展示空間は映画館を模している。シネマ風の映写室のように演出された3部屋の展示室にはおなじみの折りたたみ式観客席が設置されていて、座って作品を鑑賞することができる。どうやら、作品を構えずに気楽な態度で見ることを推奨されているようだ。また、映写室内や廊下には、各映像インスタレーション作品のために描かれた映画看板が展示されている。これらの看板は、シンガポール最後の映画看板絵師であるネオ テクによるもので、シンガポールらしさの演出の一翼を担っている。

また、展示室が全部で4部屋あるうちの1部屋は資料室となっている。そこでは、ドキュメンタリー映像やシンガポール映画史の資料が掲示されている。ドキュメンタリー映像はシャーマン オンが制作したもので、全部で3本ある。また、資料は映画資料のコレクターであるウォンハンミンのコレクションから抜粋されたものであり、それぞれがA4サイズに体よく再構成されている。どちらも、ミンウォンの手によるものではないのに、彼の個展の一部として構成されていることは興味深い。

さて、肝心の作品それ自体はといえば、言葉に窮してしまう。全部で3点の映像インスタレーション作品は、いずれも既存の映画を模倣またはモノマネしたものだ。美術館のリーフレット*曰く、「滑稽ともいえる手法で、人種的・文化的アイデンティティや、ジェンダー、言語の問題に言及してい」るそうなのだが、この説明を素直にうなずけない。なぜなら、模倣された元の作品を知らない鑑賞者には、どんなに説明を読んだところで、一体どこが滑稽で何がアイデンティティ云々なのかを把握することがで

きないのだ。

それにしても、このまったく作品に歩み寄っていけない感じは何だろう。観に行く前に元になっている映画を見るなどして、「予習」してからくるべきだったのかもしれない。いや、しかし、題材となっている作品は、1960年代前後に公開されたマレー映画、香港映画、ハリウッド映画だ。どれも、私に馴染みがなければいか、教養としてみておくべき古典的名作というわけでもない。それらは、その時代に特定の場所で生きていた人なら知っているいわゆる「国民的」映画というのが、それらの映画作品のより正確な位置づけではないだろうか。つまり、模倣の元となっている映画は、その時代、その場所における大きな物語を孕んだものであり、半世紀ほど経った今では照らし合わせるための参考資料にしかならない。

思えば、今までいわゆる西洋美術を鑑賞するにあたって、自分が西洋で生きたという経験がないことを悔やんだことはなかった。音声ガイドや解説パネルは丁寧にはわからないところを補ってくれたし、本を数冊読むだけで蓄積された知識によって、たいいてい作品を理解することができた。気がつけば、なぜその作品が素晴らしいのかも語ることができるようになっていた。知識、あるいは教養さえあれば、作品は決して私を疎外することなく受け入れてくれた。

それに比べると、ミンウォンの作品は甚だ不親切で、一方的に鑑賞者を疎外しているとしか思えない。理解する余地くらいは与えてくれれば、とも思う。彼の憎いところは、確かにこうやって歴史は流れていました、とソリッドな証拠を資料室で堂々と展示しつつも、その生きた実感みたいなものは解説してくれないことにもある。

しかし、視点を変えてみれば、そのような考えは傲慢そのものというべきものかもしれない。芸術の下に敷かれている文化的・社会的コンテクストというのは、本にまとめられ、解説され、広く世界に知れ渡ったものかをいうのではなく、人間が生きている場所に作り上げられ、形を変えていくものがその本来

の姿であるはずなのだ。知識で乗り越えていけることなんて、限られている。

では、共通するコンテクストがない人による芸術作品はどのようにして見ていったらよいだろう。知識の蓄積に頼れなくなった場所では、おそらく「理解」などという明確なものを私たちは得られない。そこで役に立つのは、素直に作品の前に立って、じっと作品を見ることと、じっと耳をそばだてること、という極めて単純な動作だけではないのだろうか。

ミンウォンが如何なる意図で映像インスタレーション作品を制作したのかは、量り知ることはできない。しかし、その作品が文化的・社会的背景の違う人に見られることが、結果として、美術作品を知識として蓄積されたコンテクストで処理していく見方や考え方への警鐘となっている。

参考図版

図 原美術館「ミンウォン：ライブ・オブ・イミテーション展」リーフレット

参考資料

雑誌；
池上裕子「メロドラマを超えて 「ミンウォン：ライブ・オブ・イミテーション」展」『美術手帖』（美術出版社）vol. 63 No. 957（2011年9月号）pp. 216-217

執筆者不明「ミン・ウォン シンガポール哀愁座」『芸術新潮』（新潮社）vol. 62 No. 9（2011年9月号）pp.129

Web；

Ming Wong 「Life of Imitation」
(<http://www.mingwong.org/index.php?/works/life-of-imitation/> 2011年10月2日アクセス)

書籍；

美術手帖（編集）「現代アート事典」（美術出版社 2009年3月10日）pp. 128-131

引用元

原美術館「ミンウォン：ライブ・オブ・イミテーション展」作品リスト

図版・資料協力 原美術館

優秀賞

いただきます

吉良 栄香 熊本県立第二高等学校 2年

アートと食には密接した関係がある、と私は思う。

幼いころに読んだ絵本、『ぐりとぐら』に出てくるあの大きなフライパンで焼かれた黄色い、ふわふわしたカステラ。小さな絵本の挿絵のなかにも、「おいしそう」だけではなく、甘い香りや味を誰もが想像していただろう。この『ぐりとぐら』を読んだから、私は食べ物に描いてある絵を見るのがとても好きになった。どんなにすごい画家が描いた風景画や人物画よりも。

なぜなら食欲がわき、何より自分が絵の中の食べ物の味や匂いについて考えていると、その絵の中に参加しているような気になり、絵の部外者ではないと感じたからだ。自分の絵の中の食べ物に対する執着はその後もずっと止められず、小・中学生の時には食べ物の絵をずっと描いていた時期もあった。

そして中学生の時、自分の欲望を満たしてくれる作品にたくさん出会った。レオナルド・ダ・ヴィンチの『最後の晩餐』や作者は忘れてしまったけれど、白玉団子やうどんを食べている人が描いてある浮世絵。

そして、何よりも衝撃的だったのがヨハネス・フェルメールの『牛乳を注ぐ女』（図1）。牛乳を注ぐ姿がとてもリアルで、切られたのか、ちぎられたようなパンとバスケットに入れられたそのままのパン。いつも食べ物に目がいつてしまう私が、それ以上にこの絵のしんとしている空気感が好きになった。

著作権保護のため図を省略
(高校生アートライター大賞選考委員会)

図1 ヨハネス・フェルメール『牛乳を注ぐ女』
45.4×40.6 油彩 キャンバス 1658-59年

この作品を好きになってからは、私は静かで、落ち着いた絵を見るのが好きになり、多くの画家たちの作品を“食べ物

目当て”なしに画集や教科書、授業で見してきた。この時間はとても夢中になれて、至福の時だと思っていた。しかし、複数のクラスメイトはつまらなさそうに絵の鑑賞をするか、あるいは居眠りしていたりして「もったいない!」と感じた。

どうでもいいと感じる人を絵画で振り向かせることはとても難しい。私は今、高校の美術科で絵を描いている。納得のいくものが描けなくて、モヤモヤすることも少なくはない。私は自分の絵も、有名な画家の絵もたくさんの人に見てもらいたいと考えている。特に、絵をあまり見ない人やどうでもいいと感じる人に。しかし、どうしたら興味をもってもらえるのだろうか。

今年の夏の終わりに、あるドキュメンタリー番組を見た。それは有名な画家が過ごした生活や描かれた絵をもとに料理を作っているというある一人の女性を取材したものだった。女性の名はキュレーター、林綾野。彼女は絵画の中の食べ物からレシピを考案し、料理をするという。その作品の隅々を見て、多くの解釈をし、深く掘下げていた。その中に、私が衝撃的な出会いをしたフェルメールの『牛乳を注ぐ女』があった。

どうやらこの絵の季節は冬らしい。この絵の中に描かれた食べ物は牛乳とパンのみであり、どのように料理するのだろうかと思った。期待と疑問を持ち、出てきたのはパンプディングというおいしそうで、牛乳とパンの香りがほんのりとしそうなお菓子のようなものだった。私は三十分間、その番組に見入ってしまい、見終わった後、“そうか!”と閃いた。

自分が食べ物のある絵を見てきたきっかけで、多くの絵画に興味を持ってきたことのように、食べ物から絵に入るといえるのはどうだろうか。その料理を食べることによって美味しさも味わえるし絵にも触れ合うことができる、一石二鳥ではないか。

そこで私も『牛乳を注ぐ女』をもとに



図2 パンプディング

パンプディング（図2）を作ってみた。牛乳を少し多めに注ぎ、卵、砂糖…と加えていくうちに、自分もあの女性になったような気持ちになった。できあがったものを家族と食べた。

思ったより甘くて、自分が考えていた絵画の中の食べ物との少しのずれや合致していた部分が明確に分かった。一緒に食べた家族はただ美味しそうに食べていたり、そばに置いておいた『牛乳を注ぐ女』の写真を興味深そうに見ていたり様々だったが、少なくともこの絵画と触れ合うことができたのではないだろうか。絵に興味深そうに見ていた一人は、「この絵と料理の関係は何なのか」と聞いてきた。

ただ食べるだけではなく、絵に興味を持ってもらえたので嬉しかったが、もっと自分の知らない人にも絵画の良さを知ってもらいたいという次の意欲にも繋がった。

今回、自分がやってきたことはテレビで見たことをそのままやる“真似”にすぎなかった。けれども、この経験を通して、一人でも多くの人に絵画の良さが伝わったかもしれない。また、自分もより深いところまで作品の良さをわかることができた。

私の周りの友人や、地域の人、世界にも絵画がどうでもいい、つまらないと思っている人はまだたくさんいる。そのような人たちに、絵画の楽しさや面白さをわかってもらうこと、また自分を含めて多くの人にアートを味わえるような活動を今後続けていきたいと思う。

引用・参考資料

MBSテレビ 「情熱大陸」 キュレーター・林綾野

「フェルメールと食卓」（講談社、2011年、p.8,70~71,110）

優秀賞 バク

菅原 光 熊本県立第二高等学校 2年

今年の夏、高校に入って初めて自分のために絵を描いた。

その絵を描き始めたのは六月上旬。ちょうど母の八回忌まで1ヵ月を迎えており、精神的につらく、何をしても身が入らなかった。前々から出したかった公募展の締め切りも近付き、そろそろ描き出さなければならず、「せっかくだから母が喜びそうな絵を描こう」と思い始めていた。

一枚は兄二人と私が公園で遊んでいる場面。もう一枚は小学校の教室の風景。昔、写真好きの父が残していたものだ。この二枚に決定するまでに、沢山の写真を見た。キャンプに行った時の写真や、保育園での行事を写した写真など。見ていっただけで思い出が次々とよみがえり、目が潤むような写真ばかりだった。

私は昔が大好きである。小さい頃の記憶があまりにも楽しくて、しょっちゅう昔に戻りたいと思うことがあった。この六月上旬は母の八回忌でナイーブだったこともあり、毎日のように「もし昔に戻れたら、また家族でいろんな所に行きたい。でも無理だよなあ」とグルグルと頭の中で考えて、その度に落ち込んでのくり返しであった。つまり未練たらたらな訳である。

母が亡くなって以来、毎年のようにこんな風にナイーブになり、ついにはちょっとした事で昔の楽しかった頃を思い出すようになった。もう自分でも思い出すのが億劫だった。

そこで私は前に何かの図鑑で見たバクに助けを求めたのだ。バクは夢を食べると言われている。その夢は寝る際に見る夢のことだったが、バクならどんな夢という文字がつくものでも食べてくれると私は思った。どうしても自分に「けじめ」をつけたかったのだ。昔のことばかりを夢見るのは、もう終わりにしなければならぬ。いい加減、けじめは必要だと。

作品「こうえん」はじゃがたに公園という場所をモデルに描いたものだ。

じゃがたに公園には母方の祖父の家に遊びに行く度にいつも寄っていた。大きな木が沢山生えていて、砂場がとても広かった。長いスライダーは怖くてあまり

滑れなかった。夏にはかき氷屋や、ホットドック屋（フランクフルト屋だったかもしれない）が並び、縁日のように賑わっていた。春にはよく花見をした。以前一度だけ私と同じくらいの子供を連れて女性がシャボン玉の液をくれたことがあった。今でもはっきり覚えている。兄弟三人で喜んだ。



「きょうしつ」 油彩 50号 2011

作品「きょうしつ」は小学校の入学式後の教室の風景をモデルに描いた。中学校よりも高校よりも一番緊張した。体育館に連れて行かれ、名前も知らない初対面の男の子と手を繋いで入場させられた。「なんでこんな知らん子と手を繋がないきゃいかんのか」と不満に思ったのを今でも覚えている。入学式の後、教室に移動した。一年二組であった。教室の周りに保護者が集まってくる。私は母と一緒にいたくてソワソワ。周りの子供達は落ち着きがなく、さっき手をつないだ隣の男の子は名札をいじるのにハマったようで、名札から目を離す様子がない。後にこの男の子とは九年間も腐れ縁が続くことになる。保育園の頃の友達とは喋れる距離じゃなかった。机は大きいし先生の顔は怖いしで小心者の私は縮こまるしかなかったのを覚えている。

これらを忘れない訳ではない。ただ、これらの思い出に戻りたい戻ろうと思う自分の未練たらしな夢を終わりにさせたかったのだ。タイムスリップできる訳でもないのに、頭の中は昔のことばかり。



「こうえん」 油彩 50号 2011

もしかしたら今、この生活がきついから、その言い訳として「昔はよかった」と思っているのかもしれない。だとしたら、ただ逃げているだけである。私は今の生活がきつい、つらいとだけしか捉えられなくて、その中にある楽しいこと、嬉しいことに気がついていないのだ。人の短所ばかりを見つけてしまって長所に気が付かないことと同じだ。

絵を描くことが大好きなのは今も昔も変わらない。美術は今と昔を繋いでくれるパイプ役になってくれた。描き始めるまでには、自分の中で何度も何度も喧嘩をした。そして喧嘩するうちに「いい加減けじめをつけようか」という結論に至った。

きっと写真だけの構図を選んでいたら、描くうちに切なさがこみ上げてきて、もっと昔に戻りたいと思ったに違いない。バクを入れることで過去を思う自分を止めることにしたのだ。

この二枚の絵が分岐点である。今までは過去、今からは未来に目を向ける時だ。たとえこの二枚が分岐点にならずとも、私の絵を描く者としての人生においては大切思い出になってくれただろう。自分のために、自分自身と喧嘩しながらも描いた絵をいつか大人になって見た時どう思うだろう。「青かった」と笑うのだろうか。けれど、それでいいのだ。この絵は今の自分のために描いた絵なのだから。

この先何枚こんな風に自分のために絵を描くのだろうか。私は私なりに美術の力を借りて、自分自身と向き合っていくと思う。

私は今、清水南高校芸術科に通っている。もちろん将来は芸術に関わる仕事に就きたいと考えている。しかし、私がこの「芸術」という道を志すまでにはたくさん迷いと苦しみがあった。

私と芸術を語る上で、一人、絶対に欠かせなくてはならない人物がいる。それは、中学校の時、美術部の顧問だった小林香苗先生だ。小林先生は、とても美術に対して熱心な先生だった。私が中学の部活動で美術部を選んでいなければ、そして顧問が小林先生でなかったのなら、今の私は、美術の道を志してはいないだろう。

美術部での活動で私は始め、友達とおしゃべりしながら絵を描いていた。しかし、小林先生はそれを許さなかった。「口が動いてると手が動かないよ!」と、私たちをよく叱咤してくれた。小林先生に言われて静かに制作に取り組むようになって、だんだん自分の技術が伸びていくのを感じた。そうすると、絵を描くのがすごく楽しくなってきた。楽しい事に真剣に取り組む…私にとって美術の時間が、すごく幸せな時間になった。

私は、ある時「清水南高校芸術科」というものの存在を知った。私は自然と清水南への入学を希望した。しかし、芸術科へ進学するという事は将来の進路を美術に限定するという事だ。以前から「自分の絵で人を感動させたい!」と私は思っていたが、美術を好きになり、知っていけばいくほど、画家で生計が立てられるか?私に絵で人を感動させられる才能があるのか?などの迷いが出てきた。

そんな風に迷っていた時に、色々な事を教えてくれたのも小林先生だった。画家で生計を立てるという事、大学へ行く意味、芸術の道に憧れる私に、とにかく色々な事を教えてくれた。その事に私は、どれだけ感謝しても足りない。

そして中学三年生の時、美術の時間にある授業をやった。その授業の内容は、いくつものモチーフがあり、それについて感じた事をそれぞれ何枚かの絵にして、それをつなぎ合わせて一つの作品を作るというものだった(図1)。

モチーフは、においだったり、音だったり、色々なものだった。その授業で私は、モチーフから「人と人の絆」というテーマを決めて制作をした。絆の儂さや、別れの悲しさ、それでも温かさのある人と人の関係、そういうものを具体的なモチーフにのせて表現した。例え

ば、絆の儂さを表現するのに、いつか必ず溶けてしまうアイスを描いた(図2)。別れの悲しさから、いつもとても悲しそうな顔をしているキリンを描いた(図3)。そんな風に見た人に想いが伝わるように作品を制作していった。



図2



図3



図4

これだけ考えて絵を描いたのは初めてだった。そして作品が完成し、鑑賞の時間が設けられた。人に私の作品を見てもらい、感想や、どんな事が伝わったのかという事を言ってもらった。すると、作品を見た人はこんな風に言ってくれた。

「この絵はなんだか、別れてしまった事への悲しい感じがするけれど(図3)、でもこちらの絵で、それでも人と人との関係は温かいものだ(図4)、という事が伝わった。」

それはまさに、私が伝えようとしていた事そのものだった。これだけ私の想いが正確に伝わるなんて、と私は感動した。しかもその人は特に美術が好きと

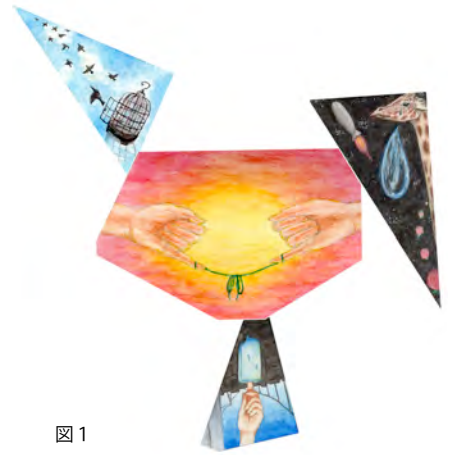


図1

か、興味がある、というわけではなかった。普通に私の絵を見て、私が伝えなかった事を感じ取ってくれたのだ。私はこの作品の制作を通して、自分の作品に自信を持つ事ができるようになった。

私は、自分の想いが作品を通して伝わるという事が、とてもうれしい事だと知った。そして、この方法で自分の気持ちを伝えていきたい、と思った。才能がなくなっても、自分の生きる道はここにある。そう断言できた。

ここで、私が絵で人を幸せにしたい、と思い始めたきっかけに触れようと思う。それには、ある本との出会いがある。西尾維新が書いた『クビキリサイクル』という本との出会いだ。この本には、「絵の天才」が出てくる。彼女は「見る者を選ぶようなものを、私は芸術とは呼ばないの」と言った。この文を読んだとき私は、すごく納得して、感動してしまった。それから私は、見る人を選ばず、だれもが感動するような絵を描きたい!と思うようになった。そして、私の絵で、世界中の人を幸せにしたい!そうも思った。この想いは、私の夢になった。この夢を達成する事は、一生かけても叶うかどうか分からない、難しい事だ。でもきっとこの夢は、私から消える事はない、一生の夢になるのだろうと思う。

さて、私のそんな壮大な夢…どうしたら叶えられるのか、どうしたら見た人全員の心を動かすような絵を描く事ができるのか。私はずっとその事を考えているのだが、どうしても答えが出そうにない。本当に難しい。しかし、このまま考え続け、ずっと絵を描き続けて努力を続けたならば、いつか、自分なりの答えが見つかるのではないかと思う。なぜなら私は中学3年のあの作品で、自分の伝えたい事を、見た人に伝える事ができたのだから。

西尾維新『クビキリサイクル』(講談社ノベルス、2002年、p.72)

優秀賞 石田徹也という世界

玉井 鼓弓 済美高等学校 1年

今まで見た中で最も衝撃を受けた画家の絵があるとすれば、私は迷わず石田徹也の絵を挙げる。

石田徹也。享年三十一。静岡県焼津市出身。地元の静岡県立焼津中央高等学校卒業後、一九九六年に武蔵野美術大学視覚伝達デザイン科卒業。その後、就職氷河期であっても無かったため就職せず、画家の道に進むことを決意した。

石田は主に現代的な建造物や日常品などをモチーフとして取り扱う。又、特徴的なのが作品に作者本人と酷似した謎の青年がよく出てくること。日常生活に潜む不安や疑念、現代社会への風刺を超現実的（シュールレアリスム）に描く。作品によく現れる青年はほとんどが同じ顔をしており、作者本人とよく似ているが、本人は自己像であることを否定している。地道に創作活動を続けていたものの、二〇〇五年に踏切事故に遭い死去。

私が石田徹也に興味を持ったのは、最近のこと。半年前、私はインターネットで色々なホームページを見て回っていた。すると偶然、石田の作品に出くわしたのである。衝撃的だった。明らかに異彩を放っていた。そのとき見た作品は「体液」といい、謎の多過ぎる作品だった。洗面台と男が合体し、水を張った洗面台の中に巨大な幼虫がいる。男の顔はぬらりと生気が無く、つかみどころのないつろな眼差しをしていた。抑揚は無いが丁寧なタッチは、独特な雰囲気ですら現実に肉薄しようとする。シュールレアリスムの代表、マグリットと重なった。シュールレアリスムにはデペイズマンという普通なら考えられない組み合わせのもので表現するという手法がある。石田はまさしくそれを使っていると思った。不可思議な石田の世界。その数ヶ月後、静岡県的美術館学芸員の方の講演で再び石田作品と出会い、それを機に石田についてより詳しく知りたくなった。彼の作

品に運命でも感じたのかもしれない。

石田の逸話に、親からの仕送りを拒否し続けたという話がある。画家は食べていくのに難しい仕事だ。石田は作品の収入よりアルバイトで生計を立て、インスタント食品ばかり食べていたという。見かねた母親が経済援助の申し出をした、当人はそれをつっぱねた。「自分がダメになるから」が理由らしい。しかし、そうして自分を追いつめることによってあのような作風の絵を描けたという見方もある。作家に限った話ではないが、裕福になるとうぬぼれ、逆に破滅するというのはよく聞く話だ。雑念を断ち切り、石田は社会や社会で生きる人々を鋭くとらえた。絵に対する執念ともいえる情熱は私も学びたいところ。

石田は現代社会への風刺を作品にすることが多い。作者の実体験もあるかもしれない。閉じ込められたように校舎をまとった青年。葬式の場面でプラモデルとして回収される遺体。時折、何を表しているのか解釈のしようがない作品もある。これらを見ていると空想に感じる不気味さと現実に対する恐ろしさを感じて途方に暮れてしまう。石田は独特な感性をもって現代社会や現代人の本質を描いた。例えば一九九七年「健康器具」はサラリーマンと思わしい男がジョギングマシーンの上を走っている。だが、彼の背後には複数の白衣の人間が定規のようなものを持って待ち構えている。機械的に働き、追いつめられる現代人の姿が浮かび上がってくる。男から白衣は見えず、もしかしたら気づいていないのかもしれない。自主的なようで実は働かされているだけだとすればもの悲しい。一九九六年「引き出し」は、再びサラリーマンらしき男が、今度はデスクの引き出しを開けている。眼差しは不安げで人目をばばかっているようだ。引き出しの中身はもう一人の男である。不安げな男と引き出

しの中でも安らかに眠るもう一人の男の対比が気になった。誰にも見せず、誰にも気付かれず眠る男こそが彼にとっての本当の自分なのだろう。

石田の絵を見た人の大半は大きな衝撃を受ける。そして立ち竦む。平面の世界が現実を圧倒してくるような気配さえある。作品を見た私達は知らず知らず、石田作品に自身の生活を透写しているのかもしれない。彼の作品は鏡のように世を写す。そこに少し作者自身と見た人の主観が混ざり、見た人をあ然とさせる。彼が今も存命していれば、現在の日本を見てどんな絵を描いたのだろう。

著作権保護のため図を省略
(高校生アトライター大賞選考委員会)

「引き出し」1996年

著作権保護のため図を省略
(高校生アトライター大賞選考委員会)

「体液」1994年頃

引用・参考資料
とんとん・につき 練馬区立美術館で「石田徹也―僕たちの自画像―展」を観た！」<http://ameblo.jp/tonton3/entry-1016614253.html>

石田徹也 - Wikipedia

はじめまして、塚田と申します。
私は自分と自分を対談させることにしました。
それは、自分の中で決着がつかずまとめることの出来ない考えがあるからです。
これはじゃんけんに任せられることではありません。
運というものには本当に大切にあり、適当・即興といったことで出現したのも大切に扱うべきであると思います。
しかし、話を重ねて見つかる事もあると思うのです
今このときに考えていることを表せていたら幸いです。

塚田A(以下A)「テーマは“アートと私”ということで芸術について語れば良いということだね」

塚田B(以下B)「そうだね、自分の過去の作品と絡めても良いという風に聞いたよ」

A「過去の作品・・・小学生の頃に図工の時間に作ったハロウィンの良くわからない絵本みたいなのが思い浮かぶよ、あれは本当に酷かった」

B「うん、あれは酷かったね 小学生の頃の作品は、考えて、考えて、これだ！と思ったものを作ってみても大体思い描いていたのとまったく違って迷走して休息に向かうみたいなのだったね」

A「ね、面白いもの作ろうって意気込む割には気に入らないものばかり作ってあ～みたいな 先生には迷惑かけたなあ、無理な発想しまくって止められてみたいなの多かったねえ」

B「あと覚えているものは小学2年生くらいのときに描いた絵 そのとき何故か自分の中でディスコが流行しててディスコに鬼が！みたいなこと考えながら紙の上端に自分の手形入れてさ」

A「そうそう、掌絵の具で真っ赤にしてね その手形が鬼の手に見えるように金で長く尖った爪入れたりね、ディスコ本体はそのとき読んでいた民話のキジム

ナーの住む大木みたいなのだったね」
B「このディスコに鬼が！は結構自分のしたいことを詰め込めた作品だったね 今から考えると自由にしていたと思うよ」

A「今も結構自由でしょう この作品はこれまでの制作の中ではお気に入りの分類に入るのだけど、芸術には入るのかな」

B「まあ芸術といえば芸術な気もするけど、あれをそうと言われたらさすし疑問が湧くかな」

A「それは、芸術は評価され、それが良くなければ意味がないってこと？そう考えると何だか悔しいなあ」

B「そこまではいわないけど、芸術が個人のものであることには変わりなくても結局は人に評価されなければそれは趣味の範囲になるという考えがあるからだよ。それに、いくら個人と言ってもあまり無闇やたらと突っ走ればただの独りよがりになってしまう」

A「芸術ってある種、独りよがり具象化されたものだとも思うけどね 上手下手ではなくてどれほどの共感が得られたかというのがその評価の対象にもなってくると思うよ」

B「共感というのもあると思うけど、その前に認識が来るのではないかな その存在を認識して、そこで始めて共感や感動が生まれると思うよ」

A「認識するというのは確かに重要なことだね たとえどんなに優れた作品が存在しようとも、人目に触れなければその作者や持ち主のみの世界で納まってしまう、本人たちがそれで良いと言うなら何も言えないけど」

B「そうだね、これが芸術が世に出て行く理由のひとつなのかもしれないね 芸術は個人のものであり、人に評価されなければならぬわけではない。けれど、こんなにも素晴らしい作品が評価されないのは悲しいと表に出そうとする人々がいるのかもしれないね」

A「うん、宇宙はあんなにも素晴らしいけれど、—これはとても大それた考え方

だけど、人が認識しなければこの地球という世界では存在していなかったかもしれないものね」

B「そういうことだね」

A「宇宙といえば、自然の中にも芸術が存在するけどあれはとっても魅力的だね」

B「うーん、自分はどちらかと言うと人工物が好き」

A「人工物も良いね あ、じゃあアールヌーボーとかも良いと思わない？あれは人工物だけど、動植物から考えを取り入れているよね」

B「アールヌーボー良いね そう考えると素晴らしい人工物というのも結局は自然という芸術から生み出されたことになるのかな」

A「元々人間もそうして生まれてきたわけだからこういう考え方もひとつの正解なのかもね」

B「今こうやって色々と話していると宇宙やアールヌーボー、ここには出てきていないけど、私が好きなアヴァンギャルドや豆腐といった様々な事柄が出てくるけど、こういう考えはどこかに書き留めておかないとどうしたって忘れてしまうものだね」

A「今この瞬間であってもしどんどん意識は別のことに向かっていっているし、同じことを考えていたとしても別の考えがまた新しく浮かんでくるかもしれない」

B「その一瞬の思考・出来事が形に表せたら、これが自分の脳内だと提示できるかもしれない」

A「それはまた難しいことだね」

B「しようと思えばできるでしょう」

A「その行動力と情熱を忘れないでいてね」

B「時間がたてばいくらでも考えは変わる。歳を重ねた自分がこの考えを見たとき笑うかもしれない。それでもこの一瞬が自分の中に確かに存在していること、若かった頃の呼吸を忘れないでほしい。」

優秀賞

ぬけがらをつくる。

津波 百合菜 大阪府立港南造形高等学校 3年

去年夏の高校展会場で、私は銅版画で一緒に出品した西川さんの作品の前でしばらく立ちすくんだ。

西川さんの作品は金賞だった。色んな感情の波が押し寄せて、しばらく作品をにらみつけていたように思う。

このころはみんなから認められたい一心で描いていたから、そのためにも、自分を肯定するためにも、金賞は欲しいとすごく思っていたから。

複雑な内面を表現しているはずなのに、優しいムードの絵。すぐ近くの自分の作品と改めて見比べた。私の作品は鳥をカラージュシ絵にした、「野鳥図鑑」は、奨励賞だった。嬉しいが、この嬉しさを小さくしてしまうくらいの、憧れと悔しい気持ち。

複雑な気分だったが、私はこのときにはっきりと、今の自分が本当は何を描くべきなのか、何を描きたいのかが見えた気がした。モチーフは自分の内面がいい。



津波百合菜「野鳥図鑑」
銅版画 60センチ×45センチ 2010年

秋になり次の展覧会、芸術文化祭に向けての制作準備が始まった。

ラフや構想は案外、たやすく出てきた。少女と、頭から出ている波。ありがちな組み合わせかも知れないが、それを描きたくて仕方なかった。

タイトルも決まっていた。「記憶の洪水」。テーマは過去の自分。波の周りには少女の内面を象徴するモチーフを置こう。ラフ段階では、凄くうまくいきそうだと、思った。

完成品はすごく自分らしいだろうし、きっと他の人にも私が伝わるだろうし、色んな人がいい作品だと認めてくれるだろう。

しかし下描きを描くために自分の内面を追求しようとすると、自分を支えている美術の価値についても今までより深く考えなければならなくなったし、昔の自分を振り返り、嫌な記憶ばかりが巡り始めた。

そして、いざ下描きを描き始めると、見る人は私をどう感じるのだろうか、ネガティブなイメージの絵を描いて誰かに嫌われないかだろうか、私の内面を象徴するようなものってなんだろう、繰り返し考えているうちに一日、また一日が過ぎ他の版画メンバーが刷り出す頃になってはまだ、私はぐずぐず考え込んでいた。ラフを思いついた頃の高揚感や自信は、もうすでに失っていたし、しつこい風邪も引いてしまった。

下書きを版に起こし、紙に波やモチーフを刷りながらも作品の価値の有無や、自分の内面について考え続けた。

同じように版画で出品する他の子がほめられているのを聞いては落ち込み、私の作品を見ている人の目を見ては落ち込み、作品について誰かに話すたびにまた落ち込んだ。

そんな心境の中完成した作品には、本当に自信がなかった。

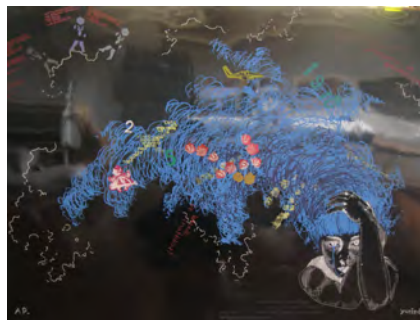
しかし、結果は「優秀賞」だった。大阪府代表作品の一つにも選ばれた。嬉しかったが、悔しそうな友達の目が怖かったし、すごく複雑な気持ちにもなった。

こんなのでは絶対手が届かないものだと思っていた自分の作品が賞を取って、「美術」に対しての解釈が変わらざるを得なくなった。極端だが、どんな作品もゆるぎない価値なんてないのではないかとさえ思った。

自分の考え方の秩序、自意識や価値観、解釈はこのときから変わり始めた、というよりも、変わることを許せるようになった。

作品の良し悪しよりももっと大切なものがあるはずだと思い、その答えを探した。

そして、私が美術をやる上で大事にすべきなのは、「記憶」だという結論に至った。「記憶」とは描いていた時の自分自身の感情、環境や一緒にいた友達や先生へのたくさんの想い、それが大事な



津波百合菜「記憶の洪水」
シルクスクリーン B1 2011年

のだ。

誰かにとっての作品の価値の有無など、もうどうでもいいと思った。

それは自分自身にも言えた。誰かにとって価値のある人になろうとしなくてもいいのだ。

あの頃から一年が経とうとしている。考え方が変わり、美術のこと以外でも以前よりもためらわずに行動が出来るようになった。

今は、自分にとって想い入れの大きな作品、また、コンセプトがしっかりしている作品を仕上げることは、自分のぬけがらを作っていくことなのではないかと思うようになった。

作品はいわば、未来の自分への贈り物であり、いつか鮮明に思い出せなくなっても、当時、確かにあった自分のからだと考えている。

未来の自分がどういった感情を持つのかも想像しながら、制作を進めていきたいと思う。

今年の高校展のための作品、「ネオテニー」（意味は幼形成熟）はシルクスクリーンで現在の自分を描いた。額を水槽に見立て、大きくなりすぎて入りきらず、半身を見せる両生類のウパールーパーに自分を重ねた。

三年間の集大成である卒業制作展には、未来の自分を飾るつもりだ。



津波百合菜「ネオテニー」
シルクスクリーン B1 2011年

西崎 絵美 熊本県立第二高等学校 2年

今、私は私を描いている。何処までも深い青の前に立って、こちらに重たげな荷物と背を向けている様子の絵だ。私は今、これを一生懸命描いている。

6月上旬のことだった。私の通う高校では、公募展へむけて制作合宿なるものが開催されていた。級友達が慌しく制作を進める中、私は大きなキャンパスの前で背中を丸めていた。描きたいものは溢れるほどあった。けれども、描けなかった。先生にエスキースを許可してもらえなかった為だ。その絵というのは、デフォルメされた男が仰向けになりながら顔を覆い、それを少女がなんとも言えない顔で覗き込んでいるといったものだ(図1)。自分が強く心惹かれる、「喜びとも悲しみともつかない感情」について一枚だった。「それじゃ表現できない。」と、先生は言った。その真意について、先生は時間をかけて沢山の言葉を私に下さった。けれど私はそれを上手に呑み込むことが出来なかった。描こうと決めていた二人の男女は、私と共に育った意味の深いモチーフだったからだ。

私が研究するテーマの一つに、劣等感的な意味での「コンプレックス」がある。人によって比重は異なるとしても、コンプレックスをもたない人はいないだろう。かくいう私もその一人で、物心ついた頃から、受け入れられない、けれどどうしようもない自分の性質と葛藤することが幾度もあった。しかし、それに囚われてばかりいては前に進めない。何とかしなくてはと考え、私が捻り出した手段が「性格化」だった。性質を象徴する存在を作ること、擬似的にコンプレックスを共感し、受け入れることが出来るのではと考えたのだ。描くつもりでいた二人は、その過程で生まれた、代役

の立たない二人だった。先生にこれらのことを伝えようとしたが、それが自分の中でしか成立していないこと、言ってしまうば妄想であることを指摘されるのが恐ろしくて、私は口を噤んでしまった。新しいアイデアが浮かぶ筈もなく、かといって眠ることさえ出来ず、その夜は何も出来ずに一日が終わった。今までに絵をここまで苦痛に感じたことはない。

幾日かが経って、私はやはりそれを描き上げることに決めた。迷いが無かった訳ではない、答えが見つかった訳でもない。呑み込めなかった言葉をゆっくり咀嚼する度、先生の言葉が一つの事実だということが身に沁みだ。自分の未熟さが恥ずかしかった。一でも、だからこそ絵から逃げることは出来なかった。私が私の中に世界を創ったのは、他でもない私が現実から逃げないためだ。先生の言葉は事実だ、けれどこの絵も私にとっての事実だ。端から見たら妄想に過ぎなかったとしても、この二人に意味がある。相変わらず筆は重かったが、出来るだけのことをやろうと決めた。

絵の締め切りが近づく中、県内の美術大学のオープンキャンパスを訪れることになった。普段なら仲のよい友人とわいわい楽しくと訪れるところだったが、私はそのとき何故かひとりで行くことを選んだ。様々な作品に触れるその最中、ある教授に、私は忘れられない質問をされた。「君は何がやりたいの?」と。そのたったの一言だったのだが、私は縮み上がった。制作合宿の夜、伝えたくて伝



図1 西崎絵美 「塩辛い夢」
2011年 F100号 油彩

えられなかったことを質問されてしまったのだ。頭が真白になりそうだった。でももう伝えられない悔しさは味わいたくはなかった。半ば捨て身ともいえる覚悟で、今までやってきた制作、自分が感じている可能性について、伝えられる限りを答えた。教授はとても真剣に、私の話を聴いてくださった。話終わると、教授は何度も頷き、「その話をもっと色々な人にしなさい」とおっしゃった。「その話は面白い」と。心がすっと軽くなるのを感じた。伝わった、そのことが何より嬉しかった。この時私の中で何かが変わった。

美術は正しいかどうかの世界ではない。もとより正しく在りたい訳ではない。私のような他の誰かに、生きていいよと伝えたい。私にとっての美術はその伝達手段だ。それでいて沢山誤解されたい。沢山失敗したい。伝わらなくてもいい。決して投げやりな気持ちではなくて、今までに無い程清々しい気持ちでそれを感じている。私の伝えたいこと、やりたいことを、やれるところまでやってみるつもりだ。

私は今、描いている。この決心を、16歳の私を。

優秀賞

媒体としての美術

福田 美穂 浜松学芸高等学校 2年

私にとっての「絵を描くこと」とは何だろう。

デッサンが自分の思い通りにいかないとき、いいアイデアが浮かばないときなどによくこの考えが頭の中に浮かぶのだ。

こうして考えてみると、幼い頃の私は「絵を描くこと」をどう思っていたのだろう。

幼い頃の私は——今でも十分に当てはまるのだが——人になじめず、一人でいることが多かったように思う。

私にとって、見ず知らずの人に話しかけるという行為は、予想以上に大きな勇気のいる行為だった。だから、寂しさを紛らわすために、夢中で絵を描き続けた。当時の私には、絵は寂しさを紛らわす、ひとつの手段であり、孤独にならないための手段でもあった。つまり、私にとって、「絵を描くこと」とは、自分の精神が壊れないための、自己防衛の手段だったのである。

時が過ぎ、中学生になった私は、幼い頃の私と同じようなことをしていた。一人で絵を描き続け、寂しさと孤独を紛らわす日々を続けた。ひとつ違ったのは、幼い頃にはいなかった、友人とも呼べる存在が一人、二人と数人いたことだった。それでも、それは同じ趣味を持つ人々がいる、美術部の活動のときのみであった。あまり仲のいい友人がいないクラスの中では、同じ小学校の人ぐらいとでしか話せなかった。とはいえ、自分が好きな種の話などあまりできるわけもなく、いつも相手が話す内容に合わせて相槌を打つ、というような簡単なものでしかなかったが。

だが、こんな私にも転機が訪れた。

それは、昼休みのことである。いつものように私が絵を書いていると、「あ、そのキャラクター、知ってる。絵を描くの、うまいね。」と頭上から言葉が降ってきた。あまり、話しかけられるのが得意ではない私はぎこちないながらも、その人といろんな話

をすることができた。とても楽しかったことを覚えている。そのきっかけから同じ趣味を持つ友人が数人、またできたのである。

このときから、私にとって「絵を描くこと」とは、寂しさや孤独を紛らわす手段ではなく、人とコミュニケーションをとるための「媒体」としてのものに変わったのである。

そして、高校生になり、西部展の時期となった。西部展というのは、静岡県高等学校美術工芸展・西部展のことで私の通っている高校ではその西部展に出す作品を描くことが夏休みの課題となっているのだが、相変わらず、私はいいアイデアが出ずに悩んでいた。なにか、いいアイデアはないだろうか。そう考えているうちにどんどん日が流れていった。そんなときに、中学校の時にあったエピソードを思い出したのである。

私は「絵を描く」ということを人とコミュニケーションをとるための「媒体」として考えていた。それならば、自分がメッセージを込めて作品を描けば、作品を通じて様々な人に何か伝えることができなだろうか。そう思ったのである。だが、そのように思い立っても、なかなかアイデアは出なかった。何を伝えればいいのか。身近にあるような、それであって訴えたいことが分かるような、そんな絵。私には、果たして、そんな絵が描けるのだろうか。

数日経ったときである。私は帰り道を歩いていた。私が住んでいるところは山が近くにあり、緑が豊かな所であるのだが、最近

は開発工事や路面建設などでいつも重機やトラックが走っていた。私の家の前も例外ではなく工事現場になっていて、昔よく兄弟と遊んでいた竹林は跡



図1 近所の風景



図2 福田美穂 「表裏一体」
2010年 B1

形もなく、一面の土が広がっていた。(図1)

———これだ。

私は直感的にそう感じた。身近にあるようで、少しずつ消えていっている自然。その自然と相反するように、どんどん増えていっている工場や住宅街、それにビルなどの人工物。今の都市が自然の犠牲の上で成り立っている、そしてその自然が今でも少しずつ消えていっている、その事実を様々な人に伝えたい、そう思った。私たちが「便利」を求めることで、消えるものがあるということも。

それから、私は作品の制作に取り掛かった。どのように描けばたくさんの人に自然がなくなる「危機」というものを感じてもらえるのだろうか。そんな風に、いろいろと悩んだけれども、私は「自分の考えを人に伝えることができる」という喜びを感じていた。幼いころには感じ得なかった感情が私の中に溢れかえっていたのである。

そうしてできた作品が「表裏一体」(図2)という作品である。自然と人工物、全く違うようで、切り離せない、そんな関係を私なりに表した作品である。まだ、技術は未熟なので表現しきれないかもしれないが、描いたことに後悔はしていない。

私は「絵を描くこと」つまり「美術」がただ自分が楽しむだけのものではなく、何かを伝えることができる、素晴らしい「媒体」の役割を果たすことを知った。今の未熟な私が表現できることは限られているけど、私は何かを伝えるような絵を描きたいと思う。

優秀賞

哀愁の美

保坂 千春 立命館慶祥高等学校 2年

私は夏休みに天宮北京・故宮博物館に行った。凛とした故宮の女性、細やかできらびやかなからくり時計、華やかなアクセサリーや鮮やかな食器を見た。

その華やかな雰囲気の中、孤独・寂しさを醸す絵があり、思わず立ち止った。

著作権保護のため図を省略
(高校生アトライター大賞選考委員会)

『寝台に寄りかかってカササギを見る』という題名の通り、后妃が寝台に寄りかかり玉器を遊び、外ではカササギが鳴く。画家は冬が去り春が来て后妃が初めてカササギを見た時の喜びを描いた。女性の背後には寿字があるが、后妃は全くそちらを見ずにカササギを見ている。社会に長生きよりも仲良く生きることが願う思想を普及した。私は、この作品に親しみを感じた。他の絵の故宮の女性も美しかったが、この絵の女性には独特の哀愁があり、心を引き付けられた。この哀愁は一体何だろうか。温かく落ち着いた色。ぼやぼやと、じわじわ一っと、線香のにおいがする哀愁。どうしてもない孤独・寂しさが押し寄せてくる哀愁。この哀愁は誰もが一度は感じたことがあるのではないかと思う。この哀愁は見る者を包み込んでいく。時間はゆっくりと過ぎていく。懐かしいような気分に浸される。小学生だった頃のこと、保育園児だった頃のこと、懐かしい思い出が蘇ってくる。物心がついた頃からずっと、私たちは孤独・寂しさ、それゆえの人恋し

さを感じて生きてきたのではないだろうか。

この哀愁と一見対照的に、家族の楽しそうな絵がある『道光帝が家族と円明園で遊ぶ情景』である。この絵は宮廷画家の作で、清末の宮廷の様子を社会に公開している。清の道光帝と皇子・皇女たちの行楽の情景を描く。場所は円明園。右奥の道光帝は優雅に鼻煙壺(かぎ煙草入れ)を持っている。何をして遊んでいるのか、戯れている子供たち、机に向かっている子、多様で面白い。しかし、よくみるとこの作品にも哀愁が感じられるのである。何とも不思議だが、なるほどとわかった気がした。なぜならば、私も絵を描いていて同じように楽しさの中に哀愁を見つけ出す体験をしたからである。

この絵は私が前に描いたものだ。帰省して『大晦日、祖父母と、』私と私の家族が、一緒に食事をしていた時の様子を、写真をもとに描いた。楽しそうな様子だ。にぎやかだ。そんな時の写真で

も、いざ絵にじっくりと描きこむうちに、なぜか哀愁ができていくのだ。しかし、楽しさははっきりとある。この絵からも伝わってくるだろうか。久しぶりに私たち家族と再会した祖父母の興奮や大晦日の楽しい一時が。

つまり、一見対照的である哀愁と楽しさは混在する、ということを実感した。私たちは哀愁という名の孤独・寂しさや人恋しさを持ちながら、それを超える楽しさを感じるのではないかと思う。



優秀賞

気まぐれな世界

宮入 惇 浜松学芸高等学校 2年

(こいつは確実にハイテクなどは程遠い。絶対にポンコツでなくてはならないのだ。)

そう思った。

そのころ僕は、読書感想画コンクールの制作に取り組んでいた。本のタイトルは「きまぐれロボット」。星新一の紡ぐショートショートとよばれる短編の集合体。一枚の絵にするのは難しいだろう。それは明白だった。

しかし、その点を踏まえても僕はどうしてもこの作品の世界を描きたかった。話としては単純明快で読みやすい。そんな内容だけど、36にわたる物語たちはどれもどこかシュールで皮肉で、だけど優しく人に何かを考えさせる。なんとも不思議で奇想天外で魅力的な世界がそこにはあった。僕は惚れた。

制作にいたって、全ての物語を詰め込むのは無理だと最初から思っていた。どれもこれも素敵な話なのだが、乱雑にぶちこめばそれはただの無法地帯にすぎず、それは僕の描きたい世界ではない。ひとつの一番お気に入りの話を掘り下げようとも考えた。しかし、そこまで非情に徹しきれず、最終的に4つの物語に主題を絞り、宇宙の話が多かったのでバックに宇宙を入れることで落ち着いた。4つの物語のなかにはもちろんきまぐれなロボットがいた。

僕はエスキースを何枚も何枚もかいた。どうすればこの本の独特の空気がながれるのだろう。この本の魅力がどうすれば、なにが一番伝えられるのだろう。制作は思ったより難航した。何度かきなおしても自分が納得できるものは出来なかった。

僕が苦心した理由はひとつである。構図はなんとなく枚数を重ねるうちにまとまってきた。しかし、どうしても気に入らないものがあった。表現方法である。この本の魅力は、

『「単純」なだけで「奥深い」』。
『「SF」なのに「アナログチック」』というある意味真逆で、相対的な雰囲気が見事に微妙なバランスをつくりあげてい

るところだと僕は思う。そこなのだ。そここのところをいかに視覚的に導き出すか。

最初の案では何とも単純にキャラクターチックであり、アニメチックだった。そうじゃない。そこまで稚拙じゃないのだ。そう思い、リアルに、よりリアルにと描きこんでいったのだが、僕の想像するものはこんな堅苦しくなく、むしろもっとひょうひょうとした空気の方がしっくりくる気がする。また描きなおす。

調節に調節を重ねなんとかまとまってきた。一番主役のロボットについて少し述べたいと思う。

このロボットはとにかくすごい。何でもできる。家事も何でもそつなくこなし、会話までできる。ハイテクだ。だが、やがておかしな行動を取り始める。とつぜん動かなくなったかと思えば、家事を放棄して逃げ出したり、あばれだしたり、おいかけてまわしてきたり……。好き勝手気まぐれを起こし始める。

僕はこのロボットのイメージにとにかくこだわった。

ハイテクなのにハイテクじゃない。『「無機質で冷たい」のに「どこか愛嬌のある」ロボット』。またもや相対的な微妙な位置にいるこのロボットを僕はおもちゃのような造形にすることに決めた。無邪気できまぐれ。まるで小さな子供のようなこのロボットをあらわすにはこれ以外あり得ない。描き起こした時にそう確信した。

全体的に画材としては、アナログ的な表現に徹したかったので水彩絵具と色鉛筆を使うことに決めていた。僕はそのまま一気に描きすすめた。

作品は完成した。

だが、それは到底納得できるものではなかった。なんとなく薄ぼんやりとした覇気のない絵。締りが無いというのだろうか。

幻想的な宇宙とそれを窓で切り取ったように別の世界を描き、4つの物語をそこに凝縮させた。そこには僕の思い描いていたような世界があったが、肝心のロ



「きまぐれな世界」

ボットの存在感が、ない。

手が止まってしまった。僕としてはここで完成して満足のはずだったのだから。

なんとも心苦しい時間がただただ過ぎていく。時にはこのままでもういいんじゃないかと思った。しかし、どうしても納得できない。でも答えはでない。どうしたらいいものか……。

ふと、考えるのをやめた。布団の上に寝っ転がり、いままで好きで集めてきた画集をばらばらとめくっていった。しばらく自分の作品から離れて新しい刺激がほしかった。ただただ眺める作業に徹する。しかし、だんだんと必ずや制作のヒントを見つけてやろうと燃えてきた。すると、あるページで手が止まった。それは完成作品ののっているところではなく、鉛筆の下書きの段階で少しかけ絵具の手が入ったラフなものであった。

これだと思った。

すぐさまはねおき自分の作品へ再び目を向ける。僕はボールペンを手に取った。水彩で完成されたはずだったロボットに新たに乱雑な線を加える。ハイテクでなくポンコツでアナログなだけど憎めないこのロボットは完成されてはいけなかったのかもしれない。ラフな仕上がりこそ一番完成に近かったのかもしれない。

描きこみが終わりなんとなく高揚した気分の僕はこの作品に「きまぐれな世界」と名付けた。

優秀賞

写真と私

村上 苑子 熊本県立第二高等学校 2年

幼稚園にいた頃だっただろうか、それとももう少し先の頃のことだったのだろうか。父の大きなフィルム式カメラを首にかけ、嬉々として写真を沢山撮っていた記憶がある。

私は小さい頃から写真を撮ることが好きだった。小学校低学年の頃、将来の夢を「写真家」と決めていたこともあるくらい（具体的に写真のこういふところが好きなんてものはなかったのだが）とにかく好きだったのだ。だが個人的なカメラブームが長く続くわけでもなかった。当時、写真を撮ること以外に絵を描くことも好きだったのだが、いつしか興味の度合いが「写真>絵」から「写真<絵」となってしまった。そして将来の夢も「写真家」から「画家」・「イラストレーター」へと変わってしまったのだ。結局その後は気持ちが揺れ動くなってもなく、今こうして美術科の生徒として学校生活を満喫しているのである。



図1 犬走りからの風景（写真）

しかし、去年の1月、まだ高校1年生だった時の事だ。高校生国際美術展に出す油絵のモチーフとして自分の家の犬走りからの風景を写真に収めようと思った。犬走りから見える向かいの白い家、青い空、画面の両端にそびえる家（図1）。綺麗で面白い画面構成にしようと何度も撮っていると、個人的なカメラブームが来ていた頃の自分を思い出した。なんだか懐かしい気持ちになった。それと同時に、またあの時のようにカメラを持ち歩いてみようかなという気持ちが湧いてきたのだ。

後日、その写真を学校の先生にも見せたところ、予想以上に評判が良く私自身

もびっくりした。今まで写真を撮ってもせいぜい家族ぐらいにしか見せておらず、家族以外の他人に写真を見てもらう機会など全く無かった。その時は、油絵の資料という形でだが初めて自分の撮った写真を他人に見てもらい、そして初めて他人に評価してもらえた。そのことがなんだかとても嬉しかったのだ。

それから私は頻りにカメラを持ち歩くようになった。カメラといってももう昔のフィルム式ではなく、コンパクトなデジタルカメラである。あまり画素数は良くないのだが、日常の中の風景や休日の出かけ先などで、とにかく気になったもの沢山撮ることにした。何枚も撮っているうちにカメラの使い方を覚え、ピントの合わせ方や色合いにも凝るようになった。思った通りのものが出来た時はとても楽しかった。

だが美術科の生徒としては、写真だけではなく絵も描くべきだろうと考えていた。デザイン方面にもともと進む予定だったので、油絵よりもデザインの作品を制作していた。しかしなかなか良いデザインの案が浮かんでこない。今年の6月頃のことであった。先生に相談していくつかアイデアを描き起こしてみるものの、コンセプトとの繋がりが弱いなどといってボツにするものばかりだった。最終的に描きたいと思えるアイデアは残らなかったのだ。そこで先生が提案してくださったのが、写真を元にしたデザイン。今まで撮ってきた写真を加工してそれを手描きで一から描いていくというものであった。作品のコンセプトを考えると苦手な私は、結局コンセプトを考える時点でつまずいたりしないだろうか少し不安だった。だが、「なぜこの絵を描いたのか」ではなく「なぜこの写真を撮ったのか」と考えを変えてみたところ、いつもよりすんなりとコンセプトが決まったのだ。

こうして初めて写真を元に作ったデザ



図2 stairs<I><II>（2011年7～9月制作）

インの作品が出来上がった（図2）。私がモチーフとして選んだ写真は、自宅の階段を真上から撮ったものである。立体物を真上から見た平面的な美しさや、綺麗な空間の形が気に入ったのが写真を撮った理由だ。つまりこれらがこの作品のコンセプトとなった。階段や空間の形の美しさが崩れぬよう、出来るだけシンプルにした。また、連作にすることによってその美しさがより際立ち、アクセントとして描きこんだ足跡も面白味を増したのではないかと感じている。

「元の写真に手を加え自分なりの作品を作る」、以前の油絵で写真を題材にしたときと言葉で表せば同じようなものだ。しかし、完成形はもちろん制作手順も全く違い、油絵のときよりも個性を出せて楽しんで制作することが出来た。

ここ半年で写真に対する興味・関心が大きく増し、「写真＝個人の楽しみで撮るもの」という考えも、「写真＝絵と同様に自分の思いを表現でき、人々に伝えることが出来るもの」という考えへと変わった。「アート」といえば絵画や彫刻などが頭に浮かぶが、写真もそれらと同様に「アート」であるということをもっと沢山の人が感じて欲しい。だから私はまだ暫くはカメラを持ち続け、写真を撮っていこう。そして、写真とデザインを組み合わせた作品をこれからも作り上げていこうと思っている。自分で考えた空想世界の中に一部分だけ写真をモチーフにしたものを入れるなど、まだまだ写真とデザインの組み合わせ方は沢山あるはずだ。バリエーション豊富で面白い作品を作っていきたい。

あなたが青紫色のシャツを着ていて、突然寒くなったとしたら、黄色のジャケットを羽織りますか。

青紫はさわやかな印象の色で、私はこの色が大好きである。一方、黄色には明るく楽しく温かい印象があり、この色も私の好きな色の一つだ。では、私が青紫色のシャツを着ていて、肌寒くなったからといってその上に黄色のジャケットを着るかと問われたら、答えは絶対にノーである。色の組み合わせとは不思議なものだと思う。

青紫は、古来日本では高貴な色と考えられてきた。朝顔や桔梗など、美しく涼しげな花も多い。しかし、私の印象では、青でもなく赤でもなく非常にあいまいな感じがする。このあいまいな感じが、日本人には受け入れ易いのであろうか。

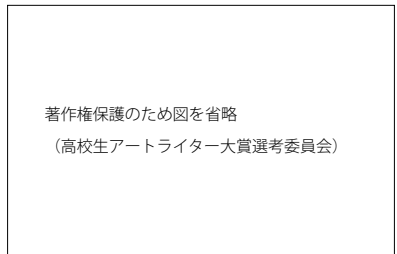
では、黄色はどうだろう。黄色には強烈な印象こそあれ、あいまいさは一切ない。それでも、日本の伝統美の中に黄色という色は多く入っているように思う。その目立つ温かさが好まれているのだろうか。

私はこの二色の一つのキャンパスの中にあることを嫌っていた。何か狂気を感じさせるような気がして、本当に嫌悪していたのである。洋服でもこの二色を組み合わせることはないし、花瓶にいける花も二色を同時に入れることはしなかった。ところが、あることが私の考えをがらりと変えたのだ。

私の母は園芸好きである。暇があると庭に出て、土いじりをしている。母はどのようなわけか黄色の花を花壇に植えない。あるとき、どうして黄色の花を植えないのか、その理由を母に尋ねたことがある。母の答えでは、黄色の花は自己主張が強すぎて、母の好きな青や白の花々がかすんでしまうからということだった。ところが、ニューヨークの郊外に住んだとき、母はある春から突然青いパンジーと黄色のパンジーを混植して玄関を飾るようになった。母にとっては初めての黄色い花の道であった。その時のことを、また私は母に尋ねた。母は首をかしげ、考えながらゆっくりと答えた。日本では花を近くで愛でるので、青や白など寒色系の花の一つ一つをじっくり見るこ

とができるが、広いアメリカでは花壇を遠くから全体像として捉える。すると、うっすら青い細かい花が散っているより、黄色などの目立つ色を入れて印象を強くした方が美しく見えるということだった。黄色いパンジーばかりだと目が疲れるので、反対色の青いパンジーを混植し、よりはっきりとした印象を作り出すことに成功していた。このパンジーの混植によって、我が家はとても明るく見え、私の考え方も変わっていったのである。

青紫と黄色。この組み合わせに慣れてくると、私はこの二色が同時にあることをそれほど嫌悪しなくなった。いやそれよりむしろ、好むようになったと言ってもおかしくない。ポルトガルの皿や、フランスプロバンス産の布地など、この二色の組み合わせのもので素敵なものはいくらでもあるではないか。そして私は最近、世界で最も美しい青紫と黄色の組み合わせに出会い、衝撃を受けた。



「夜のカフェテラス」(1888)
81×65.5cm (油彩)
クレラー・ミュラー美術館所蔵

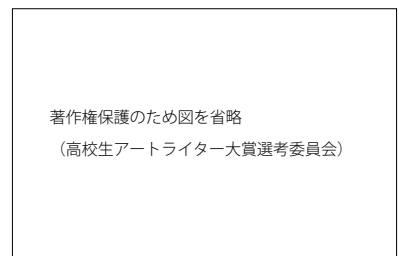
美術の宿題でゴッホのことを調べていた時である。それまでの私は、ゴッホといえばひまわり、それも黄色と黄土色のひまわりという印象しか持っていなかった。ところが、「夜のカフェテラス」の絵を見たとき、体に大きな衝撃が走った。まるで雷に打たれたようであった。私の心の中を占めていた青紫と黄色が見事なまでに一枚の絵の中で輝き合っているのではないかと、そしてそれは決して混じることなく、お互いが自分を主張し、なおかつお互いがそれぞれを引き立てている。こんな強烈な美しい絵を、私は見たことがなかった。また、驚いたのは色のコントラストだけではない。夜の

絵なのに、空が青いのだ。空が黒くないのにこの絵は夜の絵だとすぐにわかる。そしてカフェの明るい光の中にいる人々は、くつろいで幸せそうに見える。

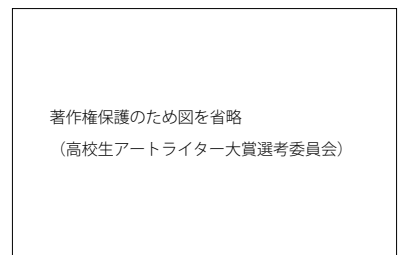
この絵が描かれたのは一八八八年で、この頃ゴッホは同居していたゴーギャンと不和になり精神的に不安定な時期であった。そんな時に幸せそうな人々を描いたのはゴッホの悲しい気持ちの反動であったのだろうか。

それ以後、ゴッホの絵に興味を持ちいろいろ見たが、青と黄色の組み合わせの美しい絵がたくさんあった。「夜のカフェテラス」以外で私が好きな絵は「星月夜」、「アイリス」である。特にアイリスは紺と黄色のコントラストが美しく、ゴッホは本当に色使いの天才であると思った。

私はすっかりゴッホのファンになり、青紫と黄色のとりこになった。しかし、そんな私でも、未だに青紫色のシャツの上に黄色のジャケットを着て街を歩く自信はまったくないのであった。



「星月夜」(1889)
73×92cm (油彩)
ニューヨーク近代美術館所蔵



「アイリス」(1889)
71.1×93cm (油彩)
ゲティ・センター所蔵

優秀賞 元気のぼりと園児が教えてくれたこと

横本 明日香 兵庫県立有馬 高等学校 3年

私は高校三年生の五月に、新宮晋さんの主催している「田んぼのアトリエ」の作品制作のスタッフとして兵庫県三田市にある、あいの保育園を訪れ、園児たちと「元気のぼり」を作りました。

元気のぼり(図1)とは、田んぼのアトリエという、田舎の風景にアート作品を展示することによって、田舎の風景を再発見することを主旨にした企画があり、そこに展示する作品としてこのぼりの形をした布に絵を描いたものことです。しかし、この企画ができた矢先に東日本大震災が起き、被災した人々を応援しようということも主旨の一つとなりました。

今回は園児たちが「元気のぼり」を作り、私たちの仕事は主に園児たちがスムーズに作業ができるようにするための手助けでした。この活動が私にとって初めての芸術支援活動でした。私はこの経験により新しい芸術の楽しみ方を学びました。

今回の経験は自分自身の芸術への関心、感性を養うことができたり、芸術支援活動という枠に捕らわれず、コミュニケーションや人との繋がりについて学ぶことができました。先生からこの活動のお話を聞き、内容がいまひとつ掴めないままあいの保育園を訪れました。園児たちと上手くやっていけるのだろうか、などと不安ばかり募る中作業に取り組み始めました。

私たちが筆や絵の具を用意して、園児たちに筆を渡そうとした時でした。園児たちは警戒しているのか、なかなか筆を受け取ろうとはしてくれませんでした。作業に入るまで気付きませんでした。この作業は園児たちとふれ合うことが多く、いくら芸術支援活動とはいえ人見知りが激しく、コミュニケーション能力をそれ程持ち合わせていない私には少し難しいことのように思えました。がんばって園児たちとふれ合おうと思っても、なかなか上手くいかず、私に子どもとふれ合うことや芸術支援活動は向いていない

のだろうかなどと自信をなくしそうにもなりました。

しかし、ある一人の男の子が話し掛けてくれました。話している内容は作業とは全く関係のないその子のプライベートなことでしたが、その子が話し掛けてくれたおかげか、他の園児たちも最初と比べて、明るく積極的に接してくれるようになり(図2)、中には「私もバケツ洗う!」と言って洗い物を手伝ってくれる子や、使った道具を水道の所に持って行ってくれた子もいました。作業開始直後の警戒心が入り乱れる緊迫した雰囲気とは打って変わって、アットホームな雰囲気で私は十歳以上も年下の園児たちからコミュニケーションは意外と簡単で肩の力を抜いて落ち着いてやれば何も恐れることはないということに気付かされました。



図2

その他にも、この活動を通して他の人の作品制作を間近で見ることができ、自分の芸術の感性を磨くことができました。自分にはない技術、アイデア、表現を目の前にして改めて芸術のすばらしさに感動しました。自分の作品制作のときは、つい恐れや不安を感じてしまい、いまいちインパクトのない作品になってしまったり、これまでの作品の二番煎じのようなものばかりを制作していました。

園児たちはまだ塗ったばかりの部分にも関わらず一心不乱に筆を動かし色を重ねすぎたため、色は茶色のようなどす黒



図1

いよく分からない色になっていました。しばらくしてその部分が乾いた時、一人の園児が鮮やかなピンクの絵の具で大胆に一線を引きました。その瞬間、全身に衝撃が走り思わず目が離せませんでした。園児は深く考えずただ色を塗りたいというような様子でしたが、そんな彼を見て私は今まで忘れていたことを思い出しました。うまく描くということももちろん大切ですが、それだけではなく何が描きたいのか、何色を塗りたいのかという純粋に絵を描きたいという感情を。この園児のおかげで私が彼と同じ年の時に抱いていたが、年齢が上がるとどこかへ置いてきてしまっていた芸術への関心、芸術を楽しむ心を取り戻しました。

芸術の楽しみ方と言えば、もちろん自分で作品制作することや、美術館などで作品を鑑賞することだと思っていましたが、この活動で、間近で他の人の作品制作を見ることができ芸術支援活動では、感性を磨いたり、参考になる技術を吸収することができるだけでなく、多くの人と出会い、ふれ合うなどの新たな楽しみ方を見いだしました。その他にも皆と笑顔を共有できるすばらしさを感じました。とても些細なことかもしれないけれど、芸術支援活動は最高の幸福を感じられる場所でした。

今後、もし自分が参加できそうな活動があれば参加したいと思っています。そして、多くの人々と芸術の楽しさを分かち合い、満開の笑顔を咲かせたいです。